
リフレッシュプリキュア！

カミオカ アキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リフレッシユプリキュア！

【Nコード】

N2896W

【作者名】

カミオカ アキ

【あらすじ】

ケアハウス「やまざくら」で暮らす中島照子は、大正生まれの元気な91歳。戦死した夫の霊に導かれ、プリキュアなる少女戦士として「怨」なる怪異と戦う羽目に…。後期高齢者プリキュア活劇、全13話を予定。pixivでも同名で公開しています。

第1話 「光の乙女は91歳！」

第1話「光の乙女は91才！」

《これ以上は押さえ込めない！》

《It's useless...》

《爆発するぞ！》

《My god!!》

《全ての力を預けよう》

《我々の最後の希望、君に託す》

《Please help people》

《「プリキュア」を頼んだぞ、中島少尉》

4月最初の週末。

東京都郊外にあるケアハウス「やまざくら」の隣には、広い公園がある。

普段は親子連れやジョギングの若者で賑わうそこでは、入所者とスタッフによる花見が催されていた。

おだやかな日差しのもとで、20人の高齢者と15名の介護職員は弁当を広げ、菓子を配り、満開の桜の下で楽しい時を過ごしていた。「ユカちゃん、箸が進んでないよ。どうしたの」

車椅子の老婆はさきほどからケータイに夢中だ。目の前に置かれた

総菜はほとんど減っていない。彼女は素早くケータイのボタンを操作すると、声を掛けた老婆に画面を見せた。

「騒がしいのは苦手…って、せっかくホームのみんなが計画してくれたんだよ。楽しみましようよ」

「照子、由加里は一度言い出したら聞かないよ」間に入ってきたのは、プラチナブロンドの髪を持つ老婆。彫りの深い日本人離れした、整った顔立ちをしている。

「ナツちゃん」

「あたしゃこつちで楽しませてもらってるけどねえ」と、ミネラルウォーターのペットボトルを傾け、紙コップに中身を注ぐ。青い目をウインクさせてそれを飲み干した。

「それってお酒…」

「シーツ、大声出さない。バレたらまた怒られちゃう」

と、由加里と呼ばれた老婆がケータイを差し出す。

「なになに、一度灸をすえられたほうがナツのため…きついわねえ」老眼鏡の奥で由加里の目が細くなる。

老婆三人が笑い合う。と、菓子袋を両手に持った若者がやってきた。

がつしりとした体型、短く刈り込まれた頭髪。ジャージの上からひよこ模様のエプロンを身につけた姿が妙にミスマッチだ。

「みなさん楽しそうっすね。マジ良かった」

「あら久司くん。あんたも食べてるかい？」照子が場所を空けようとする。若者は大丈夫っすよ、と止め、皿を置くと彼女らの向かい側に腰掛けた。

「じゅーぶん頂いてます。食べきれない程っす」

「そりゃ良かった」と、ナツが机の下に良からぬ液体を隠す。お楽しみは彼が去った後になりそうだ。

「ところで、あの端っこの和服は誰だい？見ない顔だねえ」

4人の視線の先にいたのは、桜色の着物に身を包んだ老女。高齢者らの輪に加わりもせず、宴席の端でひとり黙々と総菜を食べている。

「立花香里さんっすよ、先週入られた」

「誰だっけ」ナツが首をかしげる。

「川西さんは…なにに、私のメモリには無いって」

「ああ、あの子香里ちゃんって言うの」照子だけははたと手を打ち、ちよつとごめんね、と輪を抜け出して彼女の下へ向かった。

「お知り合いでしょっか」

「かもしんないね。照子世話好きだから」

「おせっかい、ですか…川西さん手厳しいや」

程なく二人の老女は打ち解けたようだ。照子が香里の手を取り、友人達のところへ連れて行こうとするが、香里は笑顔で首を横に振った。どうやら断られたようだ。

「ふられたねえ」ナツが苦笑いを浮かべる。

「いつでもお話する機会はあるわ。…ちよつとちよつと久司くん、あれあれ」

「見てるっす。…風祭さぁん、待って下さい風祭さーん」

小柄な老女が一人、桜並木の奥へと歩いていく。おぼつかない足取りで、ふらふらと。その正面に回り込んだ久司が、その皺だらけの両手を取り何か語り聞かせている。他にも何人かのスタッフが駆けつけたようだ。高齢者の集団はざわめいたが、すぐに元の喧噪に包まれた。

「和子さんね」

「いつもの『極楽病』が出たんでしょ」

「なにに、ちゃんと見てないほうが悪い…私もユカちゃんに同意だわ」

ほどなくして二人が戻ってきた。和子の手を握った久司が、足下に気を付けて、と声を掛けながらやってくる。和子はニコニコと笑みを絶やさない。

「和子ちゃん、出かけるときは誰かに声掛ける約束よ」

「あらあら照子さん。あなたも極楽にいらしたの」

和子にはっこりと笑った。こっそりとしたため息をつくナツ、『勝手に

殺すな』とケータイでばやく由加里。

「そうね。まるで極楽よね、こんなに綺麗な桜ですもの」

照子は曲がった腰を伸ばすようにして、霞のように広がる桜を見上げた。空は青く、雲一つ無い。穏やかな日差しが彼女らの上に差し込んでくる。

大きな―真っ黒い、墨のような色をした流れ星がひとつ、青空を横切る。それは細かく震えたかと思うと、破裂するようにはじけ飛んだ。いくつもの欠片が街の方へ降っていく。

一瞬の出来事だった。啞然として空を見上げていた照子の肩に手がかかる。

振り向くと、それは由加里だった。差し出されたケータイには『今の見た?』という文字。後ろでナツと久司がまだ空を見上げている。

「大きな流れ星でしたね」

和子はニコニコと微笑んでいる。

照子は周囲を見回した。宴席は相変わらずだ。他にあの星を見ていた者はいないらしい。

「こんな昼間に流れ星なんて」と、ナツ。「79年生きてきたけど、あんなの初めてだよ」

「91年生きてる私だって見たこと無いよ」と、照子。

「煙あげながら落ちるあたり、焼夷弾に似てたけど」

「焼夷弾ならヒューって音がするはずでしょ。街も燃えてないし」

「戦争は65年前に終わったつすよ、中島さん、黒井さん」久司が首をすくめる。

「じゃあやつぱり、ただの流れ星?」

由加里がさつとケータイを差し出す。人が多く集まるネットの掲示板だ。リアルタイムで情報が手に入るそこに、由加里はアクセスして調べていたのだ。

「ええと…特に話題は無いわねえ」

「今の、誰も見てなかったんスカね」

「隕石が落ちたってハナシも無いよ」

4人は交互にケータイをのぞき込む。和子はひとり、ニコニコしながらそれを見守っていた。

もう一人。隅の席にいた香里も、神妙な顔つきで空を見ていた。

結局、流れ星騒ぎはただの大きな隕石だろうという事で皆納得した。楽しいお花見も終わり、夕食と入浴を終えた入居者たちがそれぞれの居室へ戻った後。

「あれは一体何だったんだろうね…」

照子はひとり、窓から桜並木を眺めていた。街灯に照らされてぼんやりと浮かぶ桜は、まるで雲のようだった。

「やまざくら」では、入居者それぞれに個室が割り当てられている。特別養護老人ホームほど介護が必要な高齢者は少ない分、それぞれの生活スペースはかなりの自由がある。照子も自室に長年使用してきた家具を持ち込んでいる。

小さな茶箆笥の上には、いくつかの写真立てが置かれている。2人の子、大勢の孫と共に写った写真。どの写真でも照子は満面の笑みを浮かべている。その隣、ひとつだけセピア色をした写真を、照子は左手で――動く方の腕で取った。

「あなた、今日も一日幸せに過ごせましたよ」

写真に写っているのは軍服姿の青年。凛々しく口元を結び、まっすぐこちらを見据えている。

「今日はみなで桜を見たんですよ。ユカちゃんと、ナツちゃんと、和子ちゃん。それに久司くんもいましたよ。新しくホームに来た、香里さんともお話できました。本当に楽しい日でした」

そうそう、と照子は付け加えた。

「不思議な流れ星をみなで見ましたよ。まるで雲が落ちてくるような…」

と、窓の外にふと目をやる。また星がひとつ流れていく。

「あら、今日は一日に二回も…」

星は消えなかった。そのままぐんぐん近づいてくる。まるで、このホームを目指すようにまっすぐこちらへ向かってくる。

「あ、あなた、星がこっちに来るわ……」

光がホームにぶつかる！照子は写真立てをぎゅっと抱きしめ、ベッドに頭から潜り込んだ。

助けて！

ふっ、と、唐突に光は消えた。照子はしばらくそのままベッドの中で、念仏を唱えながらぶるぶると震えていた。が、しばらくしても何も起きない。ホームが大騒ぎになるか、誰かが助けに来ると思っ

て待っていたが、その気配もない。

…何が起きたのかしら。

写真立てを抱きしめたまま、照子はベッドから這い出した。

引き寄せられるようにして、中島少尉はその建物に飛び込んだ。病院のようなつくりをしているが、それにしては医療器具が無い。小綺麗な内装だ。あちこちに色とりどりの折り紙細工や絵が飾られているところを見ると、学校か何かだろうか。

ここに照子がいるはずだ。

中島少尉は薄暗い廊下をたどり、照子の気配を探した。無理をして長距離を飛んできた分、残りの力はもう僅かだ。もう時間がない、早く見つけなければ。

と、黄色い明かりが彼を照らす。カンテラを持った若い男だ。モンペのような服の上に、西洋風の前掛けをかけている。黒い目が半透明の中島少尉を映した。

「ひ…ひゃああ、出たー！」

失礼な奴め。物陰にさっと身を隠し、中島少尉は立腹した。大の男が女のように悲鳴を上げるとは、日本男児も落ちたものだ。やれやれ、と彼はその場を去った。

階段を降り、広間のような場所に出る。照子の気配はまだ遠い。

『…たすけて……』

と、中島少尉は辺りを見回した。生き物の気配がする。それも、今にも消えそう。

『どこだ。聞こえていたら返事をしろ』

『こつち…』

押し殺したような、苦しげな声。導かれるように少尉は飛び、声の主を見つけた。

『貴様か』

それは犬だった。広間の片隅にある檻の中、大きな茶色い犬が丸まり、苦しげに低く唸っている。この施設の番犬だろうか。

『貴様、病気か』

『わからない…胸が、潰れるように痛い…』犬は齒を食いしぱり、きつく目を閉じている。『おにいさん…僕を迎えに来たの…？』

『いや、私はある女に会いに来た』中島少尉は犬の胸のあたりをそつとさすった。『心臓の病だ。このままではじきに止まるだろう』

『僕は…死ぬの…？』犬はぼろぼろと涙を流した。『いやだ…。まだ…みんなに恩返しできてない…。痛いよ、死にたくないよ…』

中島少尉は考えた。こうしている間にも彼の体からは力が零れていく。この先ずっと霊体でいる訳にもいかない。だが、もし体があれば。

『犬よ、まだ生きていたいか』彼は犬に問いかけた。

犬は苦しげに頷いた。

『私は肉体を必要としている。その体を暫し私に貸すのならば、その間貴様は生きられる。どうする』

犬は黒い目を中島少尉に向け、最後の力で頷いた。

照子はスタッフを探してホームの中を彷徨っていた。あの光を誰かが見ていたならば、きっと騒ぎになっていると思ったのだ。

「誰もいない…変ね」

巡回のスタッフとも出くわさない。いつもならこの時間、それぞれの部屋を回っているはずなのに。

由加里かナツを尋ねてみようかしら。そう思ったとき。

『照子』

照子は立ち止まった。男の声だ、それも聞き覚えのある。それは確かに自分の名を呼んだのだ。

息子によく似た低い声。ずっと昔に聞いたことのある。

『照子、聞こえるか』

間違いない。65年前の記憶が一気に蘇った。

息子2人を残して逝った夫。白木の箱になって帰ってきた夫。南の海で眠っているはずの夫。大日本帝国海軍少尉、中島昌史。

「あなた…本当に、あなたなの？」

照子は恐る恐る振り返った。幽霊なのか。それとも、ついに迎えに来たのか。

『照子、お前なのか』

そこではたばたと尾を振っていたのは、ホーム住まいのセラピードッグ・チヨコだ。

「チヨコちゃん…」

『私は中島昌史だ』

犬と話しているところなど誰かに見られたら大変だ。痴呆と勘違いされてしまう。

照子は犬を部屋に連れ帰り、事情を聞いた。

65年の間、乗り組んでいた艦と共に海の底で眠っていたこと。訳あって霊体となり、照子の元を訪れたこと。力の消耗を防ぐため、死にかけていたチヨコの体を借りたこと。

にわかには信じがたい事ばかりだが、二人しか知り得ない事実を述べられ、照子は半ば思考放棄気味に納得することにした。

『おまえは怨念の存在を信じるか』椅子の上に行儀良くお座りしたチヨコが聞く。

「怨念？幽霊みたいなものかしら」

『少し違う。人間の悪意が集まった塊、それが怨念だ。怨念は引か

れ合い凝り固まり、やがて力を持つ「怨」になる。そいつは人間の心を浸食し、引き入れようとする。私たちは戦で命を落としてからずっと、それを封じ続けてきたのだ」

「65年の間、そんなことが…」

「戦で命を落とした私たちは、それでも残された命を守りたかった。それはどの国の兵も同じ事。沈んだ「大和」に「怨」を封じ続けてきたが…ついに限界が来た。増え続ける「怨」はついに溢れ出し、飛び出し、東京に散らばった…」

それが今日見たあの流れ星ね。照子は頷いた。

「散らばった「怨」は人々の心を浸食し、平和を壊そうとするだろう。もう「大和」に残った人々だけではどうにもならない。照子、お前の力が必要なんだ」

「わ、私？」照子はぶんぶんと手を振った。「私は見ての通り、何の力も無い年寄りよ？もう91歳だし、何ができるっていうの？」

「その為に私が来た」チヨコはまっすぐに照子を見上げた。「「大和」の皆と、米兵たちとで作り上げた力を持って。照子、プリキュアになってくれ」

「ぷりくあ？」鳩が豆鉄砲を食らったような顔で、照子は言った。

「あなた、一体何を言ってるの？」

「筋力・反射神経を霊力によって強化した、人知を超えた能力を備えた戦士。「怨」を浄化できる唯一の力だ。どうか照子、この国を救って——」

ざわり、と犬の毛が逆立った。「来たな」

「あ、あなた？」

「早速「怨」が現れたようだ。説明は後だ、行くぞ」

チヨコは椅子から飛び降り、きよきよと周囲を見回した。と、茶箆笥の上に光る物を見つける。ひどく古い懐中時計。出征前に自分が置いていったものだ。

「あれがいい。照子、懐中時計を取れ」

「こ、これ？」

照子が時計を手にとった。チョコは前足を胸に当て、何やら祈るような仕草をする。と、そこから金色の光が現れた。光はくるくると照子の周囲を回ると、その手の中の時計に吸い込まれていく。光が溢れ、照子は一瞬目を閉じた。また手の中のそれを見る。

鈍い金色はそのまま、2本の針には金の星の飾りが付いている。

『空にかざすんだ』

照子はそれを握り締めた。じわじわと、あたかな波が押し寄せてくる感覚。

ぱしっ。照子の脳裏に、ある言葉が浮かんた。見えない糸に操られるようにして、照子は左腕を差し上げた。

「プリキュアフォーム・リフレッシュ！」

時計の針が高速で逆回転を始める。

脳梗塞の後遺症で動かなかった右腕が軽くなる。曲がりかけた腰がしゃんと伸び、足に力が入る。

衰えた筋肉が、細くなった骨が、活力を取り戻す。全身の皺がみるみる消えていく。骨張った指はしなやかに、たるんだ頬は張り艶に満ち、唇は紅がかかり、手足はすらりと伸びていく。

白髪は瞬時にかつての黒さと長さを取り戻し、頭の高い所でひとつにまとめられる。それを飾るのは大きなリボン。星形の飾りが耳と手首を飾る。白い着物に紺の袴、銀のフリルがついたたすきが斜めにかかる。足には編み上げのブーツ。

91歳の老婆はもういない。凛々しく美しい16歳の少女がそこにいる。

『成功だ。よし行くぞ照子！』

「え、待つて、何よこれ！やだ体が軽いわ！」

『説明は後だ、早くしないと「怨」が人々を襲い始めるぞ！』

「だってここは3階……」

照子の袖をくわえ、チョコが窓を開け放ち外に躍り出る。引きずら

れるように転がり出た照子は、落下の恐怖に顔を覆った。だが。

「え、あ、あたし…浮いてる？」

照子の体は金色の光に包まれており、その背からは銀色に輝く翼が伸びている。

「さつきから一体どうなってるの？ぷりくあって何？どうしてこんな姿に…」

『それがプリキュアの力だ。「気」を実体化させる力が備わっている…いくぞ照子、「怨」は街のほうだ！』

「ま、待つてあなた！」

ビルの谷間では、会社帰りのサラリーマンやOLが、突然現れた巨大な怪物から逃げまどっていた。特撮映画に出てくるような化け物の出現に、テレビ局はヘリを飛ばして中継した。渋谷の巨大なスクリーンに、鉄パイプの塊のような怪物が大写しになる。

「なんだあれ」

「ドラマか映画の撮影だろ」

「いやかなりリアルなんすけど。あのビル見覚えあるし」

「番宣じゃね？どうせCGでしょ」

ファーストフード店でジュースを片手に「観戦」していた若者達は、ずしん、という揺れに顔を見合わせた。

「なに、地震？」

「揺れたよね」

ずしん、ずしん。足音のように断続的な揺れ。だんだん大きくなる。彼らは、そして店内の人々は不安げに辺りを見回した。

ずしん。ひときわ大きな揺れが渋谷を襲う。

「あれ、あれを見る！」誰かが叫んだ。皆、一斉に外を見た。

ビルの向こう側、スクリーンに映し出されていた怪物がいる。バリバリバリ、というヘリが空気をつんざく音。

「ば…バケモノ…！！」

客達は一斉に店から逃げ出した。巨大交差点にいる人々も、ぶつか

り合うようにして逃げまどう。若者達は押され、はじき出され、怪物の足下に転がり出た。頭上には鉄の塊、LEDライトのような青白い目。震える若者達の頭上に、無慈悲にその足が下ろされる――
「プリキュア・スターダスト・フォール！」

金の閃光が走り、怪物は横倒しに倒れた。

若者達は、恐る恐る頭上を見上げた。

渋谷の人々は足を止め、空を仰いだ。

へりに乗ったカメラマンは、その人物をカメラで追った。

少女は、黒いポニーテールをなびかせてビルの屋上に立っていた。

凜々しくつり上がった眉、きりりと結ばれた唇。大正時代の女学生を思わせる袴姿。

少女の姿が渋谷の大スクリーンに映し出された。

「夜空に煌めく星の光、キュア銀河！ここに見参！」

第2話 「セラピードッグは海軍少尉？」

第2話 「セラピードッグは海軍少尉？」

「やまざくら」のリビングは、昨夜のニュースの話題でもちきりだった。

渋谷に現れた怪物を退治した、謎の少女。ビルの谷間を軽やかに舞い、華麗な二刀流であつという間に怪物をバラバラにしたかと思うと、不思議な光で消してしまった。キュア銀河と名乗るその少女は、マスコミのカメラや報道ヘリの追撃をかわし、彗星の如く颯爽と夜空に消えていったという。

ワイドショーは特番を組んでこの騒動を報道し、新聞はカラー写真付きで紹介している。

「…目撃者の話によると、怪物は光を浴びて跡形もなく消え去ったとのこと」

「映画制作会社が自社作品のPRだとコメントを出しています。本当でしょうか」

「アーティストによる渋谷ジャックはよくありますねー。しかし、今回は事前予告ありませんが…」

マスコミでは、昨夜の事件はメディアによる映画の広告というシナリオが出来ているようだった。ワイドショーの論点は次第に、あの少女は新手のCGか、実在するなら新人女優かというところに論点が移っていった。

朝食を終えた高齢者たちは、めいめいわれわれテレビの前に陣取り、新聞を広げてはそれぞれの持論を語り合っている。

「なんじゃ、しーじーだったんかい」

「月光仮面の再来だと思っただがなあ」

「それにしても別嬪な娘ですな。今時珍しい清楚な顔立ち、着物姿

がまたよく似合って」

「うむ、こういふのは最近おらん。どこの女優だろう。俺は応援するぞ」

防災頭巾で頭をすっぽりと覆いたい気分で、照子はラウンジを後にした。顔から火が出るほど恥ずかしい。勢いとはいえ、何と言ったをしてしまったのだろう。

その後、チヨコが——昌史が言うままに「怨」と戦った。自然に体が動き、どうすれば「怨」を倒せるかが脳裏に浮かんた。照子が命じると、手中に二振りの刀が現れた。導かれるままに照子は「怨」を瞬時に切り刻んだ。

行動不能に陥った「怨」は、体を捨てて渋谷の人々に取り憑こうとした。

させない。

照子は刀を振りかざし、叫んだ。

「プリキュア・スターライト・セレブレーション！」

無数の星が降り注ぎ、「怨」を包み込む。同時に「怨」の核があらわになる。

照子はそれを見た。

《カエリタイ》

まだ幼い少年の声だった。金色の髪をした少年は改造バイクに乗って、集団で暴走行為を働いていた。しかし彼の心が満たされることは、無かった。

《オトウサン、オカアサン》

少年は集団を抜きたいと願い出た。集団は怒り、少年に暴行を働いた。誰かが鉄パイプを持ってきた。二度、三度、少年は撲たれた。腕から、足から、真っ赤な血が流れ出す。

《ゴメンナサイ、ゴメンナサイ》

彼を囲む若者達は誰も動かない。ニヤニヤとして見下ろしている。いつもは仲間だ、チームだと言って連れだって走ったのに。

《ボクハ、シヌノカ》

涙を流す彼の頭に、非情にも鉄パイプが振り下ろされる。

《シヌノハ、イヤダ》

闇の色をした流れ星が降ってきたのは、それと同時だった。

「…それで怪物にされたのね」

照子は、キュア銀河は泣きじゃくる少年をそつと抱きしめた。

「もう大丈夫。あなたのしてきた事は悪いことだけど、心の奥まで闇に染まっていけない」

力無く崩れ落ちた少年をそつと寝かせ、キュア銀河は少年から切り離された「怨」の核に向き合った。

「心弱きものに付け入る卑怯な怨念め、よく聞きなさい。あなたの悪事、お天道様はちゃんとして見てらっしゃるのよ！」

二振りの刀が、満天の星を宿したように輝く。

「リフレーツシュー！」

「怨」は、光の彼方に消え去っていった。

光が消えた後、チョコと照子は闇に紛れて姿を消した。やがて駆けつけた救急隊員が、散乱する鉄パイプの間で少年を見つけた。一時的な記憶の混乱が見られたものの彼に目立った怪我はなく、駆けつけた家族により保護された。後の話だが、彼の証言から暴走行為と暴行を日常的に行っていた集団が、警察によって検挙されたという少年の無事を新聞の片隅で確認した照子は、ひとまず安心した。プリキュアとやらの力を使えば、「怨」に寄生された人間を助けることができるらしい。

チョコに、いや昌史によれば、あの黒い流れ星——「大和」から逃げた「怨」は、13の欠片になって東京に降り注いだという。昨夜の一件は予想以上の早さで「怨」が覚醒してしまったが、欠片になった「怨」は、少しずつ負の感情を取り込んで成長し、やがて覚醒するという。そうなった時に唯一対抗できるのが「プリキュア」なのだ。

とは言っても。照子はため息をついた。ああまで大騒ぎになつては誰にも相談できない。肉体が若返るとはいえ、91歳の老婆にはこの大騒動、あまりに刺激が強すぎる。毎晩あんな事をしていては体の前に頭が疲れてしまふ。何とかならないものか。

「わふ、わふ」

気づくと、足下に大きな茶色い犬がいる。チヨコだ。檻から出され、高齢者たちに遊んで貰っているのだ。

「あらチヨコ。丁度あなたに会いに行こうと思っていたのよ」

『それは好都合。私も一刻も早くここを離れたかった』

「あなた？」

「チヨコちゃあん、今日はどうしたの、なんだか元気ないわね」

『何をする、やめないか！』

しわしわの頬に顔を寄せられ、チヨコはじたばたと暴れた。何人かの高齢者が頭や背を撫でる。

『気安く触るな、私は帝国軍人だ！』鼻筋をたてるが全く相手にされない。

「あらチヨコ、今日はどこか具合でも悪いの？おばあちゃんが見てあげましょうか」

『やめる貴様、腹を撫でるな！おい照子、何をしている助けないか！』

『あなた、チヨコはセラピードッグなのよ。みんなに可愛がられるのが仕事なの』

この思念通話とやらは便利だが、どうやら昌史の声は照子にしか聞こえないらしい。照子は少し同情したが、どうしようもない。

『セラピー…医療犬だと？番犬ではないのか？おいやめ、腹を、腹をさするんじゃない』犬本来の性質には勝てないのか遂にチヨコは腹を見せ、尾をぱたぱたと振り寝転がった。

「ほーら、チヨコちゃんはこうすると気持ちいいのよねえ。可愛い可愛い」

「いいこだねえチヨコちゃん」

「た、たすけてくれ…」

しばらく昌史とは話せそうにない。諦めてラウンジへ戻ろうとした照子の腰を、誰かが突つついた。

「ひゃあ誰だい…て、ユカちゃん。おどかさないでよ」

由加里は筆談用のiPadを見せる。老眼の彼女にも見やすいよう、文字が大きく設定されている。持ち歩き用にはもっぱらiPhoneだが、こちらも最近のお気に入りだ。

昨日の騒ぎ見た？

「ああ、あれね。テレビで見たわ。ユカちゃんも知ってるの？」
内心ぎくりとしながら照子は答える。

ネットじゃ動画も出回ってる。プリキュアの画像もある

「ど、動画？画像？」背中に冷や汗が流れていくのを照子は感じた。
見る？

と、由加里は何某かの操作をする。iPadの画面がテレビのようになり、少々荒い画面に切り替わる。ビルの谷間をひらりひらりと飛ぶ影。クローズアップ。ポニーテールの少女が大写しになる。

誰がこんなの撮ったのよ。恥ずかしさのあまり、照子の頬が真っ赤になっていく。不思議そうに見上げる由加里。

「あ、な、何でもないので。すごい特撮ねって思って」

画面を切り替え、筆談モードに戻してまた由加里が話しかける。

マスコミはロケとかCGとか言ってるけど、ネットじゃ誰も信じてない

「そ、そうなの？だってあんな魔法のような事ができるなんて」

現地にいた連中はちゃんと見てる。動画の検証もされてるし、どう見てもリアル

照子には判らない単語だったが、言いたいことはだいたい分かる。顔から血の気が引いていく音がする。

87歳とは思えない速さのタイピングで由加里は続ける。

ところでさっき誰か助けを呼んでなかった？

「え、ほ、ほんと？あたしは何も聞いてないけど？」

テルコのいる方から聞こえてきた。若い男の声だった

まさか。と、由加里がi padを膝に置き、赤い車椅子をこぎ出した。カーボン製の、軽くておしゃれな最新型のものだ。

照子是由加里の後を追った。ラウンジには老女の輪が出来ており、中心ではチヨコが腹を出しあられない姿を見せけている。舌をだし、うつとりと目を閉じている。

『あなた…』

『て、照子！違うんだ、これは犬の意識が…』慌てて跳ね起きようとするが、足がもつれて転んでしまう。チヨコはきちゃん、と情けない声を出した。『犬の意識が残っていて…』

と、チヨコは刺すような視線を感じた。照子の脇、車椅子に座った、短い白髪に老眼鏡をかけた老婆がこちらを見ている。膝に何かの板を置いている。

『照子、そちらの婦人は』撫で回されながらチヨコは照子を見上げた。

『川西由加里ちゃん、私の友達』

由加里は素早くi padを操作し、隠すように照子に見せた。照子の目が丸くなる。

『何だ？』

『筆談よ。ユカちゃんは声が出せないの』

由加里はじつとチヨコを見つめている。周囲の老婆たちが、チヨコに触りたいのかと場所を空けた。由加里はそろそろとチヨコに近づく、軽く一礼した。

「川西さんったら、チヨコちゃんに挨拶してどうしたの？」老婆の一人がコロコロと笑う。

『ユカちゃん、あなたの声が聞こえるんだって』

『なんだと！』

夜になるのを待つて照子はチョコを連れだし、由加里の部屋へ向かった。

由加里の部屋は機械だらけだ。大きなモニタ、ノートパソコン、その他諸々。いつ来ても照子には、何に使うのかさっぱり理解できないものばかりだ。

『すごいな。これで世界中の人間と交信ができるのか』チョコが興味深そうに眺めて回る。『川西さんと言ったか、あなたは元情報将校なのか？』

違う、私は只の趣味人。好きが高じてこうなった

由加里がi padで返答する。

『その機械式文字板もよくできている』

ケータイのほうが便利だけと、由加里はi phoneを取り出す。これまた最新型だ。カメラをチョコに向ける。

『む、今の音は一体？』

由加里は画面をチョコに見せた。茶色い犬が画面いっぱいに写っている。

『これは小型の写真撮影機か。色つきのうえ、現像不要で見られるとは。驚くべき性能だ』

カメラじゃない、これは携帯型の電話機 i padで由加里が説明する。こうすると動画も撮れる。海外の人間と通話もできる

『現代事情は偵察に出た者から聞いてはいたが、想像以上だな』

興味があるならネットを見るといい。説明するより手間が無い由加里はチョコを空いている椅子に乘せ、デスクトップパソコンを立ち上げた。簡単な操作を教えると、ニュースサイトや動画サイトを開いてやった。

チョコは食い入るようにそれらを見た。前足で器用にマウスを使い、唸ったり悲鳴をあげながら「現代の世界」を見て回った。

「で、ユカちゃん」照子が由加里に向き直る。「チョコに取り憑いているのは、私の夫の昌史さん。先の戦争で「大和」に乗っていて、艦と一緒に沈んでいたの」

昌史がパソコンに夢中になっている間に、照子が説明する。

「幽霊のままじゃいられないって、チヨコの体を借りたんだって」
オカルトは信じないけど、リアルで見たら認めざるを得ない 由加里がため息をつく。 どうして今頃テルコに会いに来た？
照子は説明した。昨夜の出来事、この国の危機と昌史の使命。そして。

「タベのプリキュア、私なのよ。信じられないでしょうけど」
ぽかんと口をあける由加里。ずり落ちた眼鏡をかけ直し、i padの画像と目の前の老婆を交互に見比べる。

「昌史さんが持ってきた力で変身したの。嘘みたいな話だけど、本当なのよ」

由加里はしばらく宙を仰ぎ、こめかみを押さえた。理解できない、という風に首を横に振り、i padを手取る。

仮にそうだと何故テルコが

「あたしもそう思ったわよ。でも、プリキュアの力を使えるのは何かの資格が要るんだって」

『プリキュアの力は、霊的エネルギーと人々の善の心が基になる。より人生経験を積んだ者ほど適応しやすいのだ』パソコンに夢中だった昌史が向き直る。『かといって老人なら誰でも良い訳ではない。波長の合う人間でないと資格は無いのだ』

「波長が合う？」

『そう。我々の思いが届く人間、照子の心に近い人間。つまり川西さん、君にもプリキュアの適性があるのだ』

「ユカちゃんか！」

由加里はぶんぶんと首と手を振る。とんでもない、という表情だ。

『ばそこんとやらで見せて貰った未来世界、私には正直理解しがたいものだ。だが、私は大和にいる者たちの代表として、プリキュアと共に「怨」を倒すという使命を背負ってここへ来た。我々の力不足の結果を押しつけるのは大変心苦しいが、どうかこの頼み、聞いてもらえないだろうか』

昌史は台から飛び降り、床にお座りをして頭を垂れた。由加里は腕を組み、困ったように眉を顰めた。間に挟まれ、照子はおろおろと二人を見比べる。

と、由加里がなにがしかi p a dに打ち込み、昌史に見せる。照子ものぞき込んだ。

正直、無理。こういう形でなら協力できるが、プリキユアは別の者を探してほしい

自室へ引き上げた照子は、ベッドに腰掛けて椅子の上の昌史と向き合っていた。

「仕方のない事よ。いきなり変身して戦ってって言われてもねえ」
「彼女を説得出来ないだろうか。お前は川西さんと仲がよさそうだが」

「ユカちゃんにあんまり無理言っちゃいけません。協力してくれるだけで有難い事なの」

「しかし…ところで照子、前々から聞こうと思っていたのだが」
「なに？」

「ここには年寄りしかいないし、医者らしい者もほとんど見ない。看護婦は家政婦のような恰好をしている。おまけに医療犬、一体この病院はなんなんだ？」

「ここは病院じゃありませんよ。ケアハウス、つまり老人ホームです」

「老人ホームとは何だ」
「説明するのが難しいけれど、つまりお手伝い付きの、年寄りだけの集合住宅よ」

昌史の、チヨコの愛らしい目がみるみる怒りにつり上がる。鼻筋に皺が寄る。

「姥捨て山！」チヨコはぐるる、と怒りに唸る。「照子、剣や隼人は何をしている！ただ一人の親をこんな所に放り込んだのか！」

「ちょっと待つて、誤解しないで！」

『あの親不孝者めが！今すぐ仕置きしてやる！ええい離せ照子！』
その時。とんとん、とドアがノックされた。照子は「ごめんね」と小さく言つて、足でチヨコをベッドの下へ押し込む。暴れるチヨコが出てこれぬよう、大きいクッションを無理矢理詰め込んだ。リモコンでテレビを付け「どうぞー」と返事をする。

「中島さん、どうかされましたか？」

若い介護士だ。巡回していたのだらう、不安そうにドアからこちらをのぞき込んでいる。

『おい照子、何をする！』

『あなたは黙つててちょうだい！』その剣幕に驚いたのか、チヨコは暴れるのを止めて大人しくなった。

「大きな声が聞こえましたが…」

「あ、いいえ、ごめんなさい。テレビの音を大きくしてしまつて。

耳が遠いと困りますねえ、ほほほ…」

「そうでしたか？何もなければいいんですが…」

ヘルパーがドアを閉める。と同時に、クッションをはねとばしてチヨコが出てきた。ぶるぶる、と体を震わせて埃を飛ばす。

『何をするんだ照子』

「いいですか、あなた。私は自分の意志でここに入ったの。剣と隼人は関係ありません。それにここは姥捨て山なんて酷い所じゃないのよ。体の悪い私たちにとっては、狭くて設備も無い家よりよっぽど過ごしやすいのよ。友達もたくさんいるし」

『だが老人を家で世話しないなど…』

「あの頃と今じゃあ、時代が違ふんです。分かつてちょうだい、あなた」

昌史はおすわりの体勢で黙り込んだ。

『時代が違ふ、か…』

と、立ち上がり、てくてくとドアのほうへ歩いていく。念道力でドアを開け、外へ出て行こうとする。

「もう戻るの？」

『頭を使いすぎて体が重い。犬の体は不自由だ、今夜は休む』

「わかったわ。プリキュア探しはまた明日ね」

チヨコはふらふらと外へ出て行った。ドアがぱたんと閉まる。

姥捨て山。随分昔は老人ホームに入ると言つと、そんな陰口を叩く者もいたものだ。

昌史は65年前の年月を飛び越えてきたのだ。老婆になった自分を見ただけでも衝撃だったろうに、様変わりした国や人間を見てどれだけ驚いたことだろう。

遺していった息子達が「母を捨てた親不孝」だと知って、どんな思いをしたのだろう。

照子は時計をぎゅっと握った。ずっと形見として飾られていたそれは、可愛い星の飾りがついたプリキュアへの変身道具となってしまった。

91歳まで生きていて、あの世へ行く前に夫と再会する羽目になるとは。照子は深くため息をついた。

第3話につづく

第3話 「変身！コンピューターおばあちゃん」

第3話 「変身！コンピューターおばあちゃん」

「チョコちゃん、最近なんだかよく食べるなあ。ごはん足りなかったかい？」

老人の手からジャーキーを貰っていたチョコは、慌てて口を離した。食糧難の時代に生きた昌史は、与えられた食事は全て有難く食べるつもりでいたのだ。ぽろりと落ちたジャーキーを前に「おあずけ」の姿勢を取るチョコに、老人らは不思議そうな顔をした。

「それは食べていいけど、今夜はこれだけにしようかね」

食べて良いらしい。犬用のジャーキーは人間の味覚には薄く感じるものだが、戦前の人間である昌史には珍味に思えた。犬の体を借りているせいか、食事にはおおむね満足している。

老人たちが食べている白い飯と野菜の煮物、焼き魚、それに菓子は昌史の食欲をそそった。が、犬である自分には水と専用の乾燥飯しか供されない。それでも食事と寝床、丹念なブラッシングや風呂まですて完備されているこの環境は、昌史にとって大変満たされたものだった。

番犬というのは屋敷の外の小屋に繋がれ、残飯のみそ汁掛け飯を食っているものだ。それが何という待遇の良さだ。これでは文字通りの「お犬様」ではないか。

あの夜、心筋梗塞を起こしたチョコの意識は戻らないままだ。いくら呼びかけても答えないチョコに代わり、昌史はその記憶にある情報を頼りに働いた。といつても年寄りらの遊び相手になる程度だったが。

せらぴーどつくなるものは、特別な訓練を受けた愛玩犬だと分かった。チョコも施設で指導を受けた後にこの「けあハウス」に送られ

てきたらしい。それより前の記憶は、霧がかかったように見えない。どうもチヨコにとって触れられたくない記憶のようだ。

朝の食事を給餌された後、檻から出されて長椅子の置かれた広間で年寄りらと戯れる。頭や腹を撫で回されるのは不愉快だったが、それが仕事ならば仕方が無い。チヨコの記憶通りに昌史は年寄りに擦り寄り、投げられた玉を拾う。良い子だねえと撫でられれば尾を振って答える。体を間借りしている分はチヨコとして働かねば。

『本当ならば、こんな事をしている暇はないのだが』

年寄りの口臭に鼻を突かれながら昌史は愛想笑いをした。と。

不意に尾を踏まれ、チヨコはぎゃんと鳴いた。

『痛い！何をするか！』

振り返ると、小柄な老女がニコニコと笑っている。小ぎれいに整えられた白髪が小さな顔を縁取っている。照子より若いようだ。

『尾を踏むな、早くどこなか！』

「あらあら可哀想に。チヨコちゃんしつぽ踏まれちゃってるよ」
きゃんきゃんと騒ぐチヨコを囲んでいた老人たちが、老女の足に敷かれた尾をひっぱり出す。

『千切れる、無理に引つ張るな！こら年寄り、もつと丁寧に扱え！』

「だめだよ風祭さん、チヨコちゃんのしつぽ踏んじや可哀想よ」

風祭和子は、一息遅れて足の下を見、あらあら、と足をどけた。

「ごめんなさいね。わたし、気が付かなかったの」と、和子はチヨコの頭を撫でた。「あなたが困っていたから、お話しようと思って来たの」

話だど？きよんとするチヨコの周りで、老人たちが困ったように笑った。

「風祭さん、チヨコは犬だからお話できないんだよ」

「あら？だってこの方、困ってらしたのよ？」

「そうか、そりや大変だ。おい、誰か来てくれ」

「風祭さんの『極楽病』が出たぞ」

前掛けを付けた看護士が来て、何か語りかけながら和子連れで行

く。困ったような顔をした和子は、何度もチヨコを振り返りながら去っていった。

「ちよつと良くなったと思ってたが、また出たか」

「特養へ移ることになるのかねえ」

「まあ身よりも無いし、痴呆があんまり酷くなる前に移したいって所じゃねえのか」

なるほど、あの老婆は呆けているのか。自分の声が聞こえたのではと期待したが、そうではないらしい。そう簡単に次のプリキュアが見つかる訳はないか。床に臥せり、昌史はため息をついた。鼻先で揺れるひげがくすぐつたい。

彼らの前には巨大なテレヴィジョンがあり、鮮明な映像と大きな音声を発している。だらしない顔つきの若者達が頭をこづき合い、あられもない姿の女が下品な笑い声をあげている。未来社会を簡単に知ることが出来るのは便利だが、見れば見るほど腹が立つてくる。料理を作る番組では、食べきれないほどの食材をおもちやにしていた。報道番組では、親が子を殺す、年寄りが暴漢に襲われるというおぞましい事件ばかり報道される。昌史は情けなくなった。

斥候に出た仲間から多少の情報は得ていたが、まさかこれほどまでとは。皆が命を懸けて守ったこの国は一体どうなってしまったのか。やるせない気持ちで昌史はテレヴィジョンを眺めた。

《…日本坂トンネルを先頭に上下約30キロの渋滞が発生しており…》

画面には数え切れないほどの自動車が溢れている。

テレビの見過ぎで目が疲れた昌史は、広間を抜け出して照子を探した。気配を辿っていくと、赤い車椅子が行く手を遮った。由加里だ。『川西さんか。ちょうど良かった、照子を見なかったか』

由加里は首を横に振る。またあの電子文字盤を使おうとしたので、昌史は気になっていたことを尋ねてみた。

『君は声が出ないそうだが、こうして心で語ることも出来ないのか』

？』

由加里はしばらく考えた後、やはり首を横に振った。文字盤を昌史に見せる。

私の声が出ないのは精神的なものらしい。筆談で我慢してほしい

『それは失礼な事をした。申し訳ない』

私からも聞きたい。何故私を選んだ？

『それは…私の意志ではなく、あなたに資格があったからだ』

基準を知りたい

『プリキュアの資格を持つのは、照子と繋がりを持ち且つ、深い愛情と思いやりの心を持つ者、と聞いている』

由加里は苦笑した。冗談を言うな、というように手をぱたと振る。

『設計者達からは、とにかく照子の元へ行け、そうすれば見つかると言われたのだ。…しかし実のところ、私は「precure計画」の設計に直接携わっていないから、あまり深く事情を知らないのだが川西さん、こうしている間にも「怨」は成長していく、一刻も早くプリキュアに——』

由加里は首を横に振る。くるりと車椅子の向きを変え、去ってしまった。一匹残された昌史はその後を追おうとするが、後ろから誰かに首輪を捕まえられてしまった。

「こらチヨコ、こつちまで来ちゃダメじゃない。戻りなさい」

前掛け姿の看護婦だ。昌史は仕方なく広間に戻り、寢床で丸くなった。夜になってから抜け出すしか無さそうだ。

大型連休にはまだ早いが、その土日は晴天に恵まれて絶好のレジャー日和となった。

花見の次は山へピクニック、河原でバーベキュー。湾岸地帯のレジャーランドへ。老いも若きもみな、マイカーに荷物を詰め込み繰り出した。

各地の高速道路は、そんな人々の車でごったがえしていた。

「……はい、22時までには本社に納入します、ですから…」

時刻は21時過ぎ、東名自動車道を東京へ向かう一台の大型トラック。荷台には大量の書籍。運転席のドライバーは焦った声で、携帯電話のイヤホンマイクに呼びかけた。ハンドルを握り締めた掌に、じつとりと汗がにじむ。

「え、大丈夫です、はい、はい…」

プツリと通話が切れる。ドライバーはイヤホンをむしり取るようにして外すと、掌の汗を首のタオルでぬぐった。

大丈夫なんかじゃない。ここからいくら飛ばしても間に合う訳が無い。しかし間に合わなければ、その責任は彼だけの物ではない。

“ガソリン高騰で運営がギリギリだ。人件費から削るしか”

“これで無理なら別を当たるだけ。運送会社はいくらでもいる”

“あなたが休憩無しで走ればいいだけの話です”

申し訳無いと給料を下げ、自らも手弁当で取引先を回る社長。断れないと判っていて、無理難題をふっかけてくる取引先。電話の向こうの、自分を舐めたような口をきいた若い娘。

ドライバーは歯ぎしりをした。周囲をノロノロ走る邪魔なミニバンたちを眺める。

はしやぎまわる子供、阿呆のように笑う母親。運転席には間抜け面の父親。

自分の家族を思い出す。仕事ばかりで構ってやれない息子、休日も無くパートで忙しい妻。そういやしばらく、外食にも連れて行ってやっていない。

どうしてこいつらはあんなに楽しそうで、俺だけがこんな目に遭わなきゃならない。

俺の邪魔をして、俺を、俺の家族を不幸にして。

「……こいつら。みんな」みんな、事故っちまえばいいのに。

そう言葉にした瞬間。

『その願い、叶えよう』

ノイズ混じりの音が聞こえた。

加賀久司は、夜勤に入りたくなかった。

先日夜間巡視の際にあるものを見て以来、夜中のホームを歩くのが怖くなってしまったのだ。

軍服姿の幽霊。

不審者ならば得意の柔道で退治できるが、相手はSF世界の住人だ。それまで幽霊など信じなかった久司だが、こればかりは驚いた。腰を抜かした彼は這々の体で詰め所へ逃げ帰り、事の顛末を皆に報告した。

だが、誰一人そんな与太話を信じる者などいなかった。監視カメラには何も映っていないし、だいいち不審者が入り込んだなら警備システムが作動するはずだ。久司の言動は一笑に付された。

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、悪霊退散、悪霊退散……」

皆は笑ったが、どう考えてもあれは幽霊だった。時刻は午後10時を回ったあたり、手首に数珠を巻き、近所の神社で買ったお守りとおもちの十字架ペンダントを首からぶら下げ、念仏を唱えながら久司は夜のホームを巡回していた。

と、懐中電灯の光を受けて光るものがある。すわ人魂、と後ずさった。が。

「……なんだ、チヨコじゃないか。脅かすなよ」

廊下にいたのはチヨコだった。久司は胸をなで下ろした。と、妙なことに気づく。

「あれ、お前なんで檻から出てるんだ？誰か鍵閉め忘れたのか？」

と、チヨコの首輪を掴んで檻へ入れようとする。

「あ、もしかしてお前、こないだも勝手に出歩いてたんじゃないか？そうかそうか。そういう事か」

幽霊の正体見たり枯れ尾花。久司は勝手に納得し、安心した。だが。

『……そうか、貴様この間の腰抜けか』

低い男の声。久司はひっ、と辺りを見回すが、誰もいない。チヨコだけが彼をじっと見上げている。

「…俺、疲れてんのかな…ほらチョコ、中へ入ってる」そう言つて檻の中へ入れようとする。

と、不意にチョコが暴れ出した。低く唸り、久司の腕に噛みつかんと歯をむき出しにする。

「こーらチョコ、暴れるな」

『いかん、この気配は「怨」だ。ええい離せ腰抜けっ』

「ひええっ」

チョコは首を振って久司の手をふりほどくと、老人たちの部屋があるほうへ駆けていく。

「あ、こら待て、おいてかないでくれー…もう幽霊やだー…」

立たない足腰を引きずるようにして、久司はチョコを追いかけた。お守りと数珠をしっかりと握りしめて。

音を立てて開いたドアに驚いて、照子はベッドから起きあがった。

誰もいない——いやチョコがいる。

「あなた？急にどうしたの？」照子は皺の奥の寝ぼけ眼を擦った。

『「怨」が現れた。行くぞ照子、プリキュアに変身だ』チョコは柵の上の時計、キュアクロックをくわえ、照子に突きつける。その時、入り口のドアがノックされた。

「ちよつと隠れて」照子はチョコをそつとベッドの下に押し込むと、ドアの向こうに呼びかけた。「どうぞ、入っていいわよ」

ドアの向こうから来たのは、赤い車椅子の由加里。手にはiphoneがある。

「あらユカちゃん、こんな時間にどうしたの」

『川西さんか。ならば大丈夫だな』ブルブルと体を振るい、まとわりついた埃を落とすチョコ。『これから我々は出撃するが、君はどうする』

「無理言わないって言ったでしょ、あなた」照子は左手でキュアクロックを握り締めると、由加里に向き直る。「ごめんね、後からでもいいかしら。何時になるかわからないけれど」

嫌な予感がして来た。また戦うのか 心配そうな表情で、由加里はiphoneの文字を見せる。

「だーいじょうぶ。悪い奴はちゃっちゃと退治してくるから」皺だらけの顔をいつそうしわくちゃんにしてニツと笑い、照子はキュアクロックをかざした。

「ユカちゃんは安心して待ってて頂戴ね」

高速道路を流れる車の列は、まるで宝石の首飾りのように見える。チョコに続き、夜空を駆けるキュア銀河。都心の夜景が遙か眼下に広がり、あつという間に後ろへと飛んでいく。大昔に一度だけ乗ったジェットコースターのような。

目が回りそうな気分をぐつとこらえ、銀河は遙か前方に目を凝らした。黒い口をぽっかりと開けた東京湾を背景に、異なる種類の闇がいる。

「あれが、怨」身にまとう空気が揺れた気がした。

『照、いや銀河、おじけづくな』チョコが叫ぶ。『「怨」は邪念、プリキュアの力である「善」の心とは逆の意志だ。隙を見せるな、奴らはそこに付け込んでくる』

「わかつてるわよ！」威勢よく啖呵を切り、銀河は闇目指して急降下を始めた。

「困ってる人があそこにいる。私が助けしないで、誰がやるっていうの！」

テレビを兼ねたパソコン画面に緊急報道の文字が躍っている。首都高に現れた巨大な怪物が、周囲の車をはねのけて闊歩している。ベッドに腰掛けたままで、由加里はうつむいていた。

機械だらけの由加里の部屋で、唯一ひとの匂いがある場所がある。小さな棚のガラス戸の奥に、数冊のアルバムと写真立てがある。

由加里はテレビから聞こえる報道に耳を傾ける。消防と警察、それに機動隊が向かっているが、太刀打ちできないとレポーターが伝え

ている。大事件があると必ずインターネットで情報収集するのだが、今日はそんな気になれなかった。

《――、あれは、自衛隊のヘリ、いえ、少女です！少女、いえプリキュアです！》

男性レポーターの、歓喜を含んだ絶叫。追いかけるようにカメラが小さな光をとらえた。すぐにアップになる。長いポニーテールをなびかせた、たすき掛けに袴姿の少女。

ついさつき、目の前で照子が変わ身してみせた姿だ。

《あれはプリキュア、やはり来ました！全国のみなさん、プリキュアが、キュア銀河が助けに来ました！》

照子。由加里は俯いたままで祈った。

「はあああーっ！」

急降下しながら、銀河は巨大な「怨」のどてつぱらに、全体重をかけて踵から蹴りをいれた。手ごたえがあった。「怨」はドウ、と大きな音をたてて数十メートル吹き飛んだ。

トレーラーの荷台を何個もくっつけてロボットにしたような形のそれは、5、6階建てのビルほどの大きさだ。これを一人で退治するのは、いささか骨が折れそうだ。

「怨」は倒れたままびくびくとけいれんしている。その隙に銀河はあたりを見回した。

高速道路の路面はあちこち削れて、アスファルトにひびが入っている。巻き込まれたと思しき自動車があちこちに横転し、壁に突っ込んで燃えている。ひっきりなしに聞こえるヘリのローター音と、鳴り響くサイレン。消防車が近くまで来ているようだが、この様子では近づけないだろう。

「乗っていた人は無事かしら。閉じ込められてなきゃいけない！」
側壁に衝突しているミニバンの中で、誰かがガラスを叩いている。
子供だ。どこか怪我をしているのか、顔に血がついている。必死の形相で助けを呼んでいる。

「待ってて、いま助けるわ！」車のドアに取りつくが、衝突の衝撃でどこか歪んだのか、ひっかかったように開かない。

「プリキュア、助けてプリキュア！」子供は涙と鼻水を流して叫んでいる。「お父さんとお母さんが起きないの！助けて！」

「大丈夫よ！今助け——」

『危ない銀河！』チヨコの思念通話が叫んだ。

《キュア銀河、どうしたんでしょう！防戦一方です！》

レポーターの逼迫した声に、由加里は責められるような思いで唇を噛んだ。

あなたにはプリキュアの資格がある。照子の夫の言葉が脳裏を何度もよぎる。

もし私が一緒に行けば、照子の助けになれるのか？

でも。由加里はぎゅっとiphoneを握り締めた。小さなサッカーボールのストラップが揺れる。

いつも私は何もできない。逃げてばかりの、汚い卑怯者でしかない。保険金泥棒、慰謝料たんまり貰いやがって。こちらにも取り分あるんだろうな。信じていた人々の口から出た言葉。

子どもまで亡くなって可哀そうに。どうせ老い先短いだし、ばあさんが代わりになれば良かったのに。疫病神を見るかのような目をした近所の人々。

老人ホームで悠々自適だって。家屋敷までうつぱらって、とんだ強欲ババアだ。

石もて追われるように逃げ出した我が家、もう帰るところも無くなつた。

《消防車が20台以上駆けつけていますが、怪物の攻撃で近寄れません！負傷者の救出はいつになれば——》

《子供です、車内に子供がいます！》

レポーターの声に由加里ははじかれたように顔を上げた。

望遠映像で撮られた現場の様子が映っている。キュア銀河がかばう

ようにしている一台の車、ガラスの向こうに誰がいる。幼い子供だ。泣いている。

怪物が腕を振るった。紙吹雪が無数の刃となり銀河を襲う。金色の光を盾にして銀河は背の子供を守るが、完全に防戦一方だ。

「キユア銀河、子供を守っています！これでは戦えません、一刻も早く機動隊の突入を――」

由加里はベッドに腕をつき、無理やり体の向きを変えた。が、細い腕は体重を支えきれず、由加里はベッドにあおむけに倒れ込んだ。首を伸ばし、そのまま後ろの棚を見る。

交通事故で失った、大切な家族の集合写真。真ん中で、サッカーボールを手に満面の笑みを浮かべた少年。

あの日、グシャグシャに潰れた車内で、おばあちゃん逃げて、と言って息絶えた、由加里のたったひとりの孫。

由加里はぎゅっとiphoneを握り締めた。

「俺が隙を作る！銀河、お前はその瞬間にスターダストフォールをぶつける！」

チヨコは四肢をふんばり、体に力を込める。「怨」に攻撃するつもりだ。

「無茶よあなた！」剃刀のような紙吹雪をシールドで防ぎながら、銀河が叫ぶ。「それにさつき、あなたから出た光は何だったの!？」

「判らん、とにかく今はそうするしかない！いくぞ！」

チヨコが地を蹴る。犬離れた跳躍力で宙に舞い上がり、光をまとってクルクルと回転する。その勢いで「怨」の足を蹴り飛ばす。ダメージは与えられなかったものの、「怨」はチヨコの存在に気付いたようだ。巨体を揺らして振り返る。チヨコが叫ぶ。

「今だ銀河！」

銀河がシールドを解き、そのまま右手を差し上げる。握った拳から金色の光があふれる。

「プリキュア、スターダスト・フォー……」

が、「怨」のほうが早かった。チョコのほうを向いたまま、腕だけを銀河に向ける。角張った手のなかに紙吹雪が現れる。剃刀より鋭い刃が銀河を襲う。逃げられない！

銀河は全身で背後の車をかばい、チョコは銀河めがけて駆けだした。レポーターは悲鳴を上げた。そのとき。

「プリキュア・ライトニング・アローっ……」

紫色に光る無数の矢が紙吹雪をとらえ、地面に射止めた。

銀河は、チョコは、その場にいた者はみな、その声の主を空に見上げた。

「次は本体」

再び降り注ぐ光の雨。全身にそれを受けた「怨」は、うめき声をあげてバランスを崩し、倒れた。グググと低く唸り、憎い相手を見上げる。

高速道路の看板の上、銀河と同じたすき掛けの袴姿をした少女が弓を片手に立っている。

みつ編みを編み込んだボブヘア、金色の稲妻の飾りがヘアバンドを飾っている。その鋭い、いたずらつこを彷彿とさせる眼光に銀河は、照子は見覚えがあった。

「ユカちゃん？」

ちちち、と指を振り、少女は両手を腰に構えて胸を張った。凜とした、よく響く声で告げる。

「闇裂く一筋の閃光、キュア紫電！ここに参上！」

『来てくれたのか、川西さん』チョコがわん、と嬉しそうに吠える。『さっきのエネルギー塊は、君が呼んだんだな』

「別にあんたの為に来た訳じゃないからね」と由加里、キュア紫電がシニカルな笑みを見せる。「そのテル、じゃなかった、キュア銀河を助けるためだから。勘違いしないで」

うがぁ、といまいましたげな声を上げて「怨」がキュア紫電に襲いかかる。巨大な腕を伸ばし少女を捕えようとするが、紫電は舞うようにすり抜けていく。

「遅い遅い！」弾むようにして地面を蹴り、その勢いで体ごと「怨」にタツクルをかける。どう、という轟音と共に「怨」が倒れる。

「もういつちょ！」宙高く飛び上がると、両手に紫の閃光を纏わせたまま、拳を振り上げる。激しく放電するそれを紫電は「怨」にぶつける。

「プリキュア、スパークキング・クラッシュヤーっ！」

閃光が周囲を包む。カメラの映像は砂嵐になり、それぞれの報道スタジオは大混乱に陥った。

「中継、中継がつながりません！」

「電波障害が……！」

知ってか知らずか、紫電はニヤリと微笑んだ。そして銀河に向き直る。

「さあ、浄化するのは銀河、アンタの役目よ！」

「言われなくとも！」銀河は両手を宙に差し出す。光でできた二振りの刀が現れた。手に取ると、銀河は「怨」にそれを向けて叫んだ。
「プリキュア・スターライト・セレブレーション！」

ドライバーは、その光景を見た。

若い上司に頭を下げる男、コンビニの安い弁当をかき込み、次の取引先へ向かう男。自分の子ほどの小娘に馬鹿にされながら、笑顔を作り働く女。そうして貯めた金で、ようやく得たつかの間の休暇。自分がめちゃくちゃにしたのは、そんなささやかな幸せだった。

「みんながみんな、幸せばかりって訳じゃない」傍らの娘が、少し悲しそうな声色で言う。「あんたもそうでしょうに。あの人たちと同じように、小さな幸せの為に頑張ってるなら」

みんな、辛い思いをしながら頑張って生きてるんだ。忙しさのなかで忘れちゃってた。

「…俺も、もう終わりか」自嘲気味にドライバーは言った。吐き捨てるように。「会社も、家族も」

いいえ、と少女は首を振った。

「想像しただけでこんな目に遭うなら、今頃みーんなバチが当たってるわよ」

少女は微笑んだ。

「大丈夫。少し寝て起きたら、全部元通りよ」

そしてドライバーは、また意識を失った。その体から、夜より深くうつろな闇が離れていく。銀河はそいつをきつとにらみ、刀を向けた。

「…疲れた人の心を弄ぶ卑劣な怨念よ。あんたの悪事、お天道様はちゃーんと見てらっしゃるのよ！」

二振りの刀が、満天の星を宿したように輝く。

「リフレーション！」

紫電が車のドアをはぎ取ると、よろけるようにして子供が出てきた。両腕で抱きとめ、なだめるように背を撫でる。

「怪我は…切り傷だけみたいだね。一緒に乗ってる人は？」

「お父さんとお母さんが…」しゃくりあげながら少年が言う。と、サイレンの音が響いてきた。消防隊がようやく近づいてこられたのだ。そこで早速消火活動が始まっている。

「ええと…プリキュアの方、その子供は！？」消防服の男性が紫電に近づく。ここらが引き上げ時か。紫電は抱えた子供を消防隊員に託した。

「軽傷よ。車内に意識の無い両親がいるわ。早く救助を」急いで踵をかえし、浄化を終えた銀河のもとに向かう。このままでは自分の顔まで全国版にはつきりくつきり映ってしまう。

「銀河、さつさとトンスラするわよ！」

「ユカちゃん待って。その前にもうひと仕事、いいかしら？」

「バレたら嫌だから紫電って呼んで。何する気？」

『銀河、何をするつもりだ』チヨコも足元へ来ている。
「ちよつとだけ寄り道よ」

湾岸の夜空を、金色の光の河が走る。

キユア銀河が作りだした星の道を、元通りになった大型トラックが滑っていく。運転席のドライバーは意識を失ったままだ。

出版社の前に光の河が到達し、ほぼ同時に大型トラック、そして2人のプリキュア、それに犬が舞い降りた。報道を見ていた社員や野次馬たちが、押し合いへしあい詰めかけている。

「こんばんは、英講出版社のみなさん」銀河の笑顔に男性陣はつい鼻の下を伸ばし、チヨコが鼻筋に皺を寄せた。

「お届け物に参りました」隣でシニカルな笑みを浮かべる紫電。「ちよーつと遅れたけど、そちらさんも相当無理言ってたようだし、事情が事情だし。許してくれるよね？」

「え、ええと、あの…」先頭に押し出された中年男が、愛想笑いのような焦ったような顔をする。「何の事でしたっけ？」

「そのへんに」と野次馬を指し、紫電。「ケータイで撮ってる奴いるだろうから言っちゃうけど。不況で大変なのはしゃーない、けど、あんま下請けいじめるのはやめなさいよ。またこんな事件起きたら溜ったもんじゃない」

「とりあえず、今回の遅刻はこれで勘弁してくださいね」と、ぺこりと頭を下げる銀河。「ドライバーの方がそろそろ起きますので。」

私たちはこれで失礼します」

では、と、少女たちは空に舞い上がる。残された人々は、あぜんとしてそれを見上げていた。

そして運転席では。

「……うっ、ん、よく寝た。…あれ？」

都心の明かりがどんどん遠ざかっていく。あれほどのさく追いかけてきたヘリが、ふらふらと別方向に行ってしまった。

「ヘリコプターが帰ってくれたわ」

「アタシがジャミングしたからよ」と、口の端だけを持ち上げてニヤリと笑う紫電。「便利なことに、これもプリキュアの能力みたいね。これで安心して帰れるでしょ」

『川西さん』と、チヨコ。『共に闘ってくれるのか』

「だーからー。勘違いするなって言ったでしょ？アタシは照子の手伝いをするだけ。別に中島さんの為じゃないってば」

「ユカちゃん、あなた声が」思い出したように、銀河。「それに足も」

「部屋でテレビ見ててね、気づいたケータイが光って、こうなってほら、と腰のiphoneを指す。紫色のケースに入ったそれは、小さな稲妻の飾りがついていた。

「照子のところに行かなきゃって思ったら、いつの間にかこうなってたの」

「私の時と似てるわね」

「しかしこれ便利ねー。足腰は立つし声は出るし」紫電はあーあー、と発声練習の真似をする。「健康な体にいつでもなれるんだから」

『ちよつと待ってくれ、プリキュアの力は無限ではない』慌てて止めるチヨコ。『「善」の心の力を使い果たせば、変身することもできない。無暗に消費するのはやめたまえ』

「あらそうなの。残念」

『「怨」が悪意を糧とするのとは逆に、プリキュアの糧となるのは人々の善意だ』チヨコがもっともらしく語る。『感謝、思いやり、それらが高まれば高まるほど、君たちは強い力を得ることができるのだ』

「ユカちゃん：来てくれてありがとうね」

「今更何言ってるのよ。あ、ほら見えてきた。「やまざくら」よ」手をひらひらと振り、ほら、と紫電が丘の向こうを指し示す。桜並木に囲まれるようにして、小さな明かりが灯っている。

「なんか大変そうだけど、いい運動と、それにボケ防止になりそう

だし。こうなったら付き合ってやりますか」

今度はアタシが照子を助ける番。紫電は、由加里はそう小声でつぶやいたが、風の音でかき消された。

車道に身を投げ、家族の後を追おうとした自分。そんな自分を、身を呈して引き留めた照子。擦り傷だらけになりドライバー達から罵声を浴びせられながら、由加里の手をしっかりと握って笑った照子を、由加里は思い出した。

iphone にぶら下がった、古ぼけたストラップをぎゅっと握りしめる。

「海くん。おばあちゃん、今度は逃げないから」

第4話につづく

第4話 「気になるあのコは3人目!？」

第4話「気になるあのコは3人目!？」

『では現場からの中継です。坂田さん、現場の坂田アナ、聞こえますでしょうか?』

『はいこちら坂田です。昨夜の「アンノウン」襲撃の爪痕も生々しいここ首都高速では、一時間前の午前7時半、ようやく通行止めが解除されました』

『えー、先の渋谷襲撃事件と併せて、正体不明の怪物の名称が「アンノウン」と統一された訳ですが。重要参考人、プリキュアと名乗る少女たちについて、何か情報はありましたか、坂田アナ』

『いえ、新しい情報は入っていません。現在警察が遺留品の調査を行っているところです』

『ありがとうございますました坂田さん。一旦天気予報を挟んで、引き続きプリキュアについて検証を続けます』

照子が新聞を広げると、チヨコが隣に来て一緒に覗き込んだ。

『あら、もうテレビはいいの?』

『小島アナウンサーの出番は終わった。新聞の情報も見ておきたい』昌史お気に入りのお天気お姉さんだ。長い黒髪と清楚な顔立ちが、アルバムで見た孫とよく似ているらしい。苦笑しながら、照子は老眼鏡を鼻にひっつけた。

昨夜の事件がカラー写真入りで大きく取り上げられている。もちろん一面はキュア銀河と、新たなプリキュア…キュア紫電だ。

芸能プロダクションによるPR説は既に忘れ去られているようだ。またもプリキュア大活躍、新たな少女戦士登場、彼女らの正体は。まるで映画のパンフレットのような文句が並ぶ隣に、ひっそりと「

英講出版社社員、事件の重要参考人として事情聴取を受ける」と記されていた。気の毒なトラック運転手の待遇が少しでも良くなることを、照子は祈った。

『こんなに目立つちゃって。私、恥ずかしくて顔から火が出そう』
『善行に恥も何もなかるうに。堂々としていれば良いのだ。…照子、頁をめくってくれ。連載小説が読みたい』

「はいはい」思わず声に出してしまい、照子は慌てて口を塞いだ。周囲を見回す。大丈夫、誰にも気づかれてはいない。老人たちは皆テレビ画面狭しと活躍する「キュア銀河」と「キュア紫電」に夢中だ。男性陣は既に銀河派と紫電派に分かれているらしい。女性陣の冷やかな視線も気にせず、婦女子は淑やかに限るだの強気な娘も良いだのと喧々諤々唾を飛ばし合っている。テレビの中では、銀河、紫電と来たから次は零だろうなどと、既に次のプリキュアを予想している。

みんな勝手なものだ。照子は、もう何度目か分からない溜息をついた。

『おい照子』新聞の上に乗るような姿勢で、連載小説を読んでいたチヨコがふと顔を上げる。『川西さんはまだ寝ているのか』

「平熱ですね。はい、口を大きく開けてください」

ベッドに横たわったまま、由加里は大きく口を開いた。中年の医師がその奥を覗きこむ。

「…喉が少し腫れていますね。風邪ではないと思いますが、念のため薬を出しときましょう」

看護師と介護士が掛け布団を元に戻し、部屋から出て行った。由加里は枕に頭をうずめた。全く、慣れないことはするものではない。昨夜張り切りすぎた反動だと、朝一番で見舞いにやってきたチヨコは言った。長年使っていない声帯をいきなり酷使し、そのうえ急激な環境の変化に体と頭がついていけなかった、と。

『案ずることは無い、じき慣れる。現に君より高齢の照子は初めて

戦った後何ともなかったのだ」

それって鈍いつて事かしら、と照子にチクリとされ、そそくさとチヨコは出て行ったが。

「無理はしないでね」由加里の手を取り、照子は言い聞かせるように告げた。「元はと言えば、あたしたち夫婦の問題なんだから。ユカちゃんに迷惑掛ける訳にはいかないわ」

照子はそう言ったが、乗りかかった船をここで降りるなんて真似はしたくない。何より由加里は亡き孫に約束したのだ。今度は逃げない。

そう考えると、いてもたってもいられずに由加里はベッド脇のiphoneを手に取った。紫の稲妻飾りがついたそれで、インターネットにアクセスする。情報収集も重要な仕事だ。

『紫電たんアネゴカワイイ』

『弓道少女萌え』

由加里はiphoneの電源を落とした。

『交通事故に遭ってから体も不自由だったし、ずっと声も出なかったんですから。急にプリキュアなんて大変よ』

『だが…む、な、何をするか！』キャン、と悲鳴をあげ、チヨコは椅子から飛び降りた。背後に立っていた老婆に耳を引っ張られたせいだ。確か風祭和子。腰の曲がった、温和な顔立ちの老婆だ。いつも自分にまわりついてくるとチヨコは警戒していたが、何故だか和子の気配はいつも感じられないのだ。

「あら和子ちゃん。どうしたの？」よいしょ、と体の向きを変え、照子が問いかける。

「チヨコの耳を引っ張っちゃ可哀そうよ。痛がつてるわ」

『そうだ。耳を引っ張るなど、貴様帝国軍人を何だと思ってるか』聞こえないとわかっているのかいないのか、チヨコが怒りの声を上げる。

「ごめんなさいね。わたし、あなたとお話したいだけなの」小首を

傾けて和子が微笑む。「何だか困っておられるようだし。ね、駄目かしら」

「和子ちゃん、まさか…」

『照子、この婦人は呆けているのだ』きゅん、とチョコが鼻を鳴らす。『小間使いがそう言っていた。私の声が聞こえる訳ではない』
「お話したいの。ね、駄目かしら」小さな子供に語りかけるように、和子が繰り返す。

『あなた…』

『…これも犬の仕事だ。行ってくる』と、チョコは和子の服の裾を咥える。一緒に来い、というように引つ張ると、和子の顔がぱあつと明るくなった。

「ありがとうね照子さん。チョコちゃん、ちょっとだけお借りしますね」

『少し構ってやるだけだからな！ええい、頭を撫でるな！気持ちが悪いく』

腑に落ちない気分で、照子は二人を見送った。何だか妙な胸騒ぎがする。

加賀久司が詰め所に入ったのは、そろそろ夕食の準備を始める時間だった。今日は夜勤だ。件の幽霊は怖いが、いつまでも気にしていは仕事にならない。田舎の祖母がくれたお守りをポケットに忍ばせて、彼は出勤してきたのだ。「学業成就」と刺繍されていることも気にせずに。

「…引き継ぎはノートにある通り。512の川西由加里さんが風邪気味で寝てるんで、夕食は部屋に配膳するように。あとは…」

「ああ、301の風祭和子さん、病院のほうに連絡入れました。痴呆の件」

「風祭さんが痴呆！？」思わず大声を出す久司。先輩の介護福祉士が睨みつける。

「でかい声で言うな。だからいつまでたっても新人気分が抜けない

んだ」

「…で、でも」声を潜めて、久司。「先月の診察じゃ、軽い物忘れ程度だって」

「急に状況が変わったんだよ。昨晚だってほら、訳も無く不安がつて徘徊してたし」

「チヨコと話をするとかしたとか、この間からずっと言ってますね」検査の結果次第では親族に連絡を入れる必要もある。先輩の言葉に、久司は太い眉を寄せて考え込んだ。

「…でな、俺にはどーも、そんな風に思えないんだ」

なあチヨコ、と言われても、返事をする気にはなれなかった。この軟弱な小間使いはどうにも気に食わない。裏庭でブラッシングをされながら、チヨコはだんまりを決め込んでいた。

久司は続ける。独り言と判っているが、どうしても誰かに打ち明けずにはいらなかったのだ。

「だってさ、徘徊だってフツーは、何かしら目的があるもんだろ。

会社に行くとか子供迎えに行くとか。それが『悪い物が来る』って、ちよつと変じゃないか？物忘れだってあるけど、フツーの高齢者と同じ程度だし」

そりゃ時々極楽だの何だの言いだすけど話の筋道は立ってるし、喜怒哀楽だって変わらないのに、と久司は憤った。さっきから口ばかり動いて手が御留守だ。チヨコはわん、と吠えて催促した。

「ああ悪い悪い。でな、来週病院のほうから医者に来て、検査するつて。で、認知症が進んでいるようなら、これ以上ここで面倒見られないってんで、特養に移るんだ。そりゃ特養のほうがケアもしっかりしてるかもしれないけど。でも、環境の変化が一番ヤバいのに」俺なんかが口出せる事じゃないけどな。久司の声色は明らかに沈んでいる。

「入居者のみんなも、最近の風祭さんは何か変だって言ってるし。チヨコ、お前と話してたとか言うんだぜ」

特養というのが何かは判らないが、少なくとも和子にとって良い話ではないようだ。おまけに自分が関わったせいであらぬ疑いを掛けられている。

「親戚つてたつて、入居の手続き以来一度も来たこと無いんだつてさ。風祭さん独身で家族もないし。せつかく友達出来たのに、環境変わってもいい事無いと思うんだけどなあ」

犬のお前に言つても仕方ないよな、と、久司はブラッシングに力を入れた。抜けていない毛まで引つ張られたが、チヨコは文句を言わなかった。

数日後の日曜日。ようやくテレビでのプリキュア騒動もひと段落したようで、ニュース番組の司会者はいつもと変わらぬ政治や経済の話題を紹介していた。昼食を終えた老人たちは、めいめいリビングに陣取り午後のひとときを過ごしている。そんななか、和子は大きなソファに腰掛け、古い本を読んでいる。傍らにはチヨコが行儀よくお座り。傍目には和子がチヨコに本を読んでやっているように見えた。

そんな姿を遠目に、窓際のカウンターで照子は黒井ナツと一緒にコーヒーを飲んでいた。頭痛と喉の痛みがようやく収まった由加里も、いつもの赤い車椅子でやってきている。

「ホントに一体どうしちゃったんだい」ナツが呆れる。「こないだまであんだけ照子にべつたりだったチヨコが」

犬はもつと一途なもんだと思つてたけどねえ。知つてか知らずかそんな事を言い、ナツは無断持ち込みのブレンダーをたっぷり入れた紅茶をすする。もつとも、紅茶よりブレンダーの割合が多いことなど皆知っているが。

犬と男は餌次第で飼い主を変える　かりんとうをかじりながら、由加里。

「あれ由加里、あんだケータイ変えたね」と、ナツ。iphoneに稲妻の飾りがついてるのに気がついたのだ。「随分と可愛らし

いじゃない、あんたらしくない」

まあね

チヨコから特養の話を聞いた照子は、複雑な気持ちで和子を眺めている。確かに和子は少々ボケてはいるが、そんなにひどいものなのか。自分には全く判らないが、かえって病状が悪くなるような所に行かずに済む方法は無いものか。

「照子、また何か考え込んでるんだろう」気がつくとなツが、こちらの表情を窺っていた。「あんたは思ってることがすぐ顔に出るんだから。ホントに分かりやすいねえ」
うんうん、と由加里も頷く。

「え、そんな事、無いけれど」照子はおろおろと右手を振ると、袖口にすっかりコップをひっかけてしまった。プラスチックのコップは割れずに済んだが、残っていたコーヒーが床にこぼれ、飛沫があたり飛び散った。誰かの服の裾にかかる。浅黄色の和服だ。

「あ…」驚いたような顔の老婦人。まだ黒色の残る白髪をバレッタで留めている。

花見の時に照子が声をかけた、立花香里だ。

「ご…ごめんなさい、すぐに拭くものを…」照子は慌てて立ち上がるうとして、不自由なほうの左手を椅子にぶつけた。よろけて転びそうになる。ナツと由加里が慌てて動くが、それより早く、香里は寸でのところで照子を支えて受け止めた。

「大丈夫ですか」と、小さな声で香里。照子は声も無く首を縦に振り、香里の着物の裾に視線を落とした。茶色い飛沫が点々とシミになっていく。

「大変！お着物にコーヒーが」

「洗えばきれいになるから、心配なさないで。それより足元、気をつけて」そのまま踵を返し、香里はその場を去った。

どうしました、と声がかかる。騒ぎを聞きつけた介護職員が来たのだ。

「コーヒーこぼしただけ。それより、雑巾とバケツ使いたいんだけ

ど」ナツが言うと、職員は掃除道具を取りに向かった。

「大丈夫かい？」ナツが、拾ったコップを机に置く。「転ばなくて良かったよ」

「ごめんね。うつかりだわ」ふう、と照子は苦笑する。

「でも、あの立花ってコの着物」と、ナツは香里が立ち去った方向をちらりと見る。「洗えばとか言うけどありや安くないよ。京友禅なんてそこらのクリーニングに出せるかねえ」

洗いに出すと何万かかるんだろう

ひつ、と、照子は小さな悲鳴を漏らした。そんな高価な着物とは知らず、大変なことをしてしまった。何万もするような洗濯代の立て替えなど自分には無理だ。

「あんなもん普段着にするからだよ。心配するなって言ってたし、気にすること無いって」

ていうか、ここでそんなもん着てる事が謎

「うーん…でも…お詫びぐらいしなくちゃねえ…」

『次のニュースです』リビングのテレビからキャスターの声が聞こえてくる。

『墨田区在住の12歳男子児童が、自宅で首をつって自殺を図ったところを保護されました』

「うわ。また嫌なニュースだ」介護職員から掃除道具を受け取りながら、ナツはテレビを見やった。「子供が首吊りだなんて世も末だよ」

「ナツちゃん、私にも貸して」絞ってもらった雑巾を右手に受け取り、照子はコーヒーで汚れた床を拭く。出来ることは自分です、それがこの「やまざくら」でのルールだ。車椅子から降りられない由加里は、汚れたコップを流しまで運んでいる。

『現場からは、同級生からのいじめを示唆するメモが残されており

…』

「やだねえ、いじめなんてネクラな手で。物がありすぎるからしよ
うもない事すんだよ、今のガキはさ」やれやれ、と言いながら床を

拭き終わると、二人分の雑巾を入れたバケツを手にナツは腰を上げた。「照子は手を洗ってきな。後はアタシが片づけとくからさ」

「ありがとうね」

ナツはガニマタ歩きで洗面所へ向かった。股関節に人工関節を入れているナツは、まっすぐに歩いたり段差を越えることができない。バリアフリーでない和生活に不自由するため、古い日本家屋の家では過ごせなくなり、ここへ入居したのだ。

3人がコーヒーの後片付けをしている間に画面が切り替わった。白髪やげ頭の男らがカメラの前に並んでいる。自殺を図った児童が通う小学校の教諭らだと字幕が出ている。

中央のはげ頭の男性が釈明している。その顔が大写しになった。

それまで自分の頭を撫でていた和子の手が止まったので、チヨコはどうしたのかと顔を窺った。

「太平洋戦争史」と書かれた本が、パタリと膝の上で閉じられる。

和子の小さな目は、テレビの中にくぎ付けになっていた。

「……トモちゃん？」

字幕には、佐藤智文教頭と記されていた。

少年は自室のベッドに横たわったまま、じっと天井を見ていた。

首には包帯が巻かれており、むず痒いが直接掻き搔ることができない。もどかしい気がした。が、それ以上に、彼の心中は虚しさでぽっかりと穴が開いていた。

つい先ほどまでベッドの脇には母親がいたが、夕食の準備のため台所へ行ってしまった。四六時中監視されるのは正直鬱陶しかったが、いないと不安な気分襲われる。僕が見ていないところで悪く言われてるんじゃないか。友達と思ってた奴らみたいに。担任の先生みたいに。

父親は、病院で目覚めた時以来一度も彼の顔を見に来ない。カンリフユキトドキな学校と、偉い人を訴える準備に忙しいらしい。

学校も嫌いだけど、どうせならクラスの連中を懲らしめてくれないかな。

窓の外は曇り空だ。あの日とおんなじだ。

『お前のケータイ、カーチャンからのメールしか無いじゃん。マザコンきつもー』

『うわマジで？見せて見せて』

『ちよつと男子ー、あつちでやってよ。視界が汚れるし』

『ママに写メしてやれよ。ボクのカノジヨですとかって』

『うわ、男子最悪！撮ったらコロすからね』

ケータイを取り上げられてからかわれるのも、いつものことだ。

でも、保健室に行けば大丈夫。ほんのわずかな時間だけど。

『…で、この忙しい時期にマジ勘弁すよ』

ドアの前で足が止まった。

『子供が学校にいるうちは、そういう話題は禁物ですよ。耳に入ったらどうするんです』

『でも愚痴らにややってられませんかよ。去年のクラスは平和だったけどなー、問題児もいなかったし』

『…あまり言いたくありませんが、問題は有る無しじゃなく、発見するかそうでないかじゃありませんか？』

『でもハズレ引いた感ってのはあるんですよ。あーこりや今年一年メンドクサイなって。んじゃそろそろ…あれ、お前どうした。休みに来たのか？』

作り笑いがひきつつっていた。後ろで、保健室の先生も眉をしかめていた。

そっか、僕はハズレだったんだ。それじゃあ仕方ないよね。ゴミみたいに扱われるのも、メンドクサイって言われるのも。

『給食までには戻って…おい、どこ行くんだ？休むんじゃないのか』
もう、僕なんていらないよね。

いつの間にか自分ちの庭にいた。物置から太い紐を出してくる。大きな木にひっかけ、踏み台に乗って首をかけた。輪っかを作って頭

を通す。ドラマなんかだとここで家族とか友達が、やめなさいとか言つて止めに来るけど。母親はパートに行つてゐる時間だ。友達は…。そこまで想像したら、自然と足が踏み台を蹴飛ばした。

夕方の空をカラスが飛んでいる。5月の空にはあんまり似合わない。母親はなかなか戻らない。さつきケータイの呼び出し音が聞こえたから、多分電話してゐるだろう。

あの時保険のセールスに見つからなければ、今頃あの世だったのかな。

あの世なんてあるのかな。そこにも人が大勢いるのかな。いじめられたりするのかな。

もう、何もかもが面倒だ。どうして僕だけが、こんな思いをしなくちゃいけないんだ。

みんな、消えちゃえばいいのに。そうすれば何も考えずに済むのに。空を飛ぶカラスの黒が、だんだん大きくなっていく。空にひとつついた染みのような黒が、視界いっぱい広がっていく。夜が降りてくるように、窓の外が真っ黒になる。

「…なに、何なの」彼はベッドから体を起こした。窓辺にはカラスが一羽停まっている。濁った赤い目がじつとこちらを見据えている。

『だったら消しちやいなよ』

「…どうやって」思わず口に出た。

『簡単だよ。君は見てるだけでいい』

夕食後、照子は由加里の部屋に来ていた。香里へのお詫びに何か贈らねばと「おとりよせ」を探した。入居者同士の金品のやり取りはトラブルの原因になるため禁じられているが、高価な品でなければ大丈夫だろう。相手も気を使ふまい。だいいち照子には高級品など買う金はない。

テルコは気を遣いすぎ と言いつつ、i padで通販サイトを検索する由加里。デスクトップパソコンは、情報収集の名目でチョコ

に占領されてしまったのだ。

「怨」の仕業と思しき事件の捜査と言いつつ、プリキュアのニュースを探しては報告するのを「自分の任務」と認識したらしい。だが、自身に対する評価を見てしまつて以来それらに極力触れないようにしている由加里にとっては、嫌がらせ以外の何物でもない。由加里がこめかみをひくつかせているのが、照子にも分かった。

『おい、プリキュアの映像が音楽に合わせて編集されているぞ!』
チョコが目を輝かせる。『まるで映画のようだ。これは凄い、この放送局が制作したのだろう』

ダン、と由加里が車椅子の肘置きを叩いた。驚くチョコにiphoneを突き付ける。

MADにいちいち感動するな恥ずかしい

『エムエーデーとは何だ。それに何をそんなに怒っている。なあ照子』

キリキリと眉を吊り上げる由加里と、さっぱり分らないという口調のチョコ。間に挟まれた照子は、うーん…と困り果てたとき。ぞつとするような冷たい感触が、照子の心に触れた。

「あなた、今何か」

『ああ』チョコは椅子から飛び降り、ひげをピンと張って唸っている。『「怨」の気配だ。どこかで目覚めたな。川西さん、情報収集を』

由加里がうなずく。彼女も何か感じたらしい。車椅子を機敏に動かして移動し、キーボードに節くれだった指を走らせる。ニュース速報記事、SNSやtwitterのウィンドウが開いていく。老眼鏡の下が目が素早く走る。

「交通事故にひったくり…このなかのどれかしら」

数が多すぎる 脇に開いたメモ帳に打ち込む由加里。 けどこないだのような怪物の情報は無い

『うむ…む、これは』と、チョコが机に飛び乗った。前足で液晶モニターを叩く。

墨田区の小学校で火災発生、不審な子供がうつっていたとの目撃証言あり。

自殺騒ぎのあった学校？ 由加里がチョコを見上げる。

「まさか…「怨」が子供に取りついたのかも！」照子がきつとチョコを見る。チョコも頷き、二人を見据えた。

『行ってみれば分かる。二人とも出撃だ！』

老婆二人はポケットからキュアクロックを取り出した。それぞれ皺だらけの手で、ぎゅつと握り、天に差し上げる。照子は声に出して、由加里は心の中で叫んだ。

「プリキュアフォーム、リフレッシュ！」

「加賀くん、私も行かないと」

「何言ってるんスか、風祭さん。ほら、お風呂の用意しますよ」

詰め所のすぐ隣、何かあれば職員がすぐに駆けつけられる和子の部屋。入浴の予定が夜まで延びてしまったので、慌てて久司は和子の着替えを用意していたのだ。もちろん介助するのは女性職員だが。

「だって、トモちゃん困ってるの。私、助けないと」

お願い、と懇願する和子。一体何をそんなに困っているのだろう。

久司は首を捻った。チョコの事といい、何か理由があるのだろうか。久司には全く見当がつかない。

校舎全体が巨大なキャンプファイヤーのように燃え上がる。十数台の消防車が懸命に消火活動を行うが、まるで巨大な生き物のようにメラメラと揺れ動き、全く勢いを落とす気配が見られない。消防士たちの間に不安が募っていく。

「一体どうして火が出たのか…」教員の一人が救急隊員に説明する。その顔は煤で真っ黒だ。「手前の校舎、ちょうど6年生の教室付近から火が出たようで…消火器を持って行った時にはもう、手がつけられない状態でした」

「火の気がある所なんですか？」消防士のひとりが聞く。

「いえ、調理室から理科室からも離れています。不審火以外に原因は思いつきません」

「ろく、しち…これで全い…」彼らの頭数を数えていた校長の顔が、みるみる青くなる。

「校長先生？」

「…いない、教頭先生がいない…」

「そんな！」

教員たちが顔を見合わせて叫ぶと同時に、彼らの背を照らしていた炎がゆらり、とゆらめいた。

「あ…あれは何だ！」放水している消防士のひとりが叫ぶ。視線の先、高々と夜空を焦がしていた炎がひときわ大きくなる。オレンジ色のそれが、どす黒く色を変えた。

《…ミンナ、キエテシマエ…》地の底から響くような唸り声と地鳴りが聞こえる。

「化学物質に引火したのか!？」防護服の帽子をくいと上げ、指揮官が黒い炎を見上げる。「有毒ガスが出る可能性がある、一旦下がるぞ!」

《ニガサナイ》唸り声は憎々しげに言、そう告げる。《ミンナ、キエテシマエ》

教員たちは救急隊に急かされて逃げる。が、彼らの前に炎の壁が走り、あっという間に囲んでしまう。消防士たちが懸命に放水するが、炎の勢いは弱まらない。どんどん強くなっていく。グラウンドの真ん中で完全に孤立した人々は、熱と酸欠でひとり、ふたりと崩れ落ちていく。

「あ…熱い…」

「何だこの火は！生きてるみたいだ!」

「応援はまだか！応援は——」

外部からも放水が行われているようだが、効果は全く無いようだ。へりから散水でもすれば消えるかもしれないが、その前にここにい

る教員、救急隊員、そして消防士も皆炎にまかれるだろう。じりじりと迫ってくる黒い炎。

《キエテシマエ》それはニヤリ、と笑いの形を作ったように見えた。どうすればいい。消防隊の指揮官が空を見上げる。とその時。

紫の稲妻が走った。

直後、彼らを囲んでいた炎が紫色の雨に蹴散らされた。衝撃で地面が激しく揺れる。

指揮官は、反射的に瞑った目をこじ開ける。すぐそこに迫っていた炎が無い。代わりに、ドーム型の光る金の膜が自分たちを囲んでいる。その向こう側に人影が2つ。

立ちこめる煙を吹き飛ばすように立ちふさがったのは、袴姿の少女2人。それに、茶色い犬が1匹。

「ぶ…プリキュア！」消防士のひとりが叫んだ。「助けてくれるのか？」

「ええ」長い髪をリボンで飾った少女が振り向き、にっこりとほほ笑む。「あなたがたは私たちが守ります。安心して」

「ちゃっちゃんと片づけるから」と、ショートカットの少女が弓を構える。「そこで待っててね」

「ま、待ってくれプリキュア！」這うようにして彼女らに近寄り、校長が叫ぶ。「まだあの中に残ってる、教頭先生がいるんだ！」

「何ですって！」

ハンカチを口に当てて、炎の間をくぐるように教頭は歩いた。上履きは真つ黒になり、煙が目にしみて涙が出る。薄い髪がところどころチリチリと焦げているようだが、それどころではない。早くあの子を助けなければ。

ライターを手にした少年を追いかけるうち、いつの間にか体育館まで来ていた。幸い、まだ中まで火は入っていない。外でゴウゴウと風が吹き荒れるような音がする。

少年がいた。ステージの上に立っている。

「きみ、早くこちらへ来なさい！」痛む喉に鞭うち、教頭は呼びかけた。「今ならまだ間に合う」

《何が間に合うんですか》返事があつた。しかし、少年の口は動いていない。とても子供とは思えない、低く唸るような声だつた。《捕まえて、警察に突き出すんですか。この僕を》

「この僕、を…？」そこで教頭は気づいた。少年の首に白いものが巻かれているのを。包帯だ。細い首に包帯が巻かれている。気が弱そうな顔立ち、哀しげな目。

「…君は、もしかして…」

《やっぱりそうだ》少年は嗤つた。《大人なんてみんなそうだ。結局、僕のことなんて忘れてるんだ。どうでもいいんだ、メンドクサイんだ》

「違う！」教頭はかぶりを振る。汗と一緒に僅かな髪が宙を舞い、はげ頭があらわになるが気にも留めない。「どうでもいい子なんていない！逃げるんだ、一緒に逃げ——」

《来るな！》細い右手が上がる。掌の上に小さな黒い塊が揺れる。真っ黒なそれは、ゆらゆら揺らめく炎のかたちをしていた。天井から垂れる緞帳に吸い寄せられて燃え移り、体育館を包むように広がっていく。啞然とする教頭を見下ろし、壇上の少年は嗤つた。哀しい目をして。

「君は、一体何を…」

《一緒に死んでよ、先生》少年は嗤っていた。涙を流しながら。《先生なら一緒に死んでくれるヨね》

その口だけが違う形に動いていた。たすけて、と。

肩で息をしながら、紫電は稲妻を放つ。しかし決定的な打撃にはならない。炎に雷では暖簾に腕押しだ。

「参ったね…火の勢いが弱まらない」

『紫電、本体に攻撃はするな！教頭がまだ中にいるんだぞ』その背に隠れるようにして、チヨコが吠える。『隙を作って突入するんだ』

「んな事言っても！」黒い炎が渦になつて襲いかかる。紫電は矢を放ち、風圧で押しのける。それが精一杯だ。「その前にコツチがやられるって！」

その後ろで、銀河がシールドを張っている。銀河の力は防衛と浄化に特化しているが、攻撃力が高い訳ではない。熱と火の粉から人々を庇うので手一杯、攻撃に参加する余裕は無い。

このままじゃ、みんなやられてしまふ。銀河はかぶりを振る。そのとき。

チヨコの体が翠色に光を放つ。そして、それは彗星となつて飛び去った。

窓から飛び込んできた光は、机の上にある腕時計に吸い込まれた。驚いて尻餅をつく久司を尻目に、和子はすつくと立つて、腕時計を手にした。手際よくか細い腕に装着する。そこから翠色の輝きが溢れている。

和子は腕を空にかかげ、誰に教わつたでもない呪文を口にした。

「あなた」銀河が叫ぶ。「今は、もしかして」
『プリキュアだ』彗星が飛び去つた方に目を遣り、チヨコ。『誰かがプリキュアの力を求めているんだ』

酸欠の金魚よろしく、久司は口をパクパクさせた。

まばゆい光が消えた後に、和子はいなかった。代わりに袴姿の少女が立っている。

肩口で揃つたストレートの髪、くりつとした丸い瞳。羽を模したイヤリング。

ただひとつ変わらないのは、相手を包み込むような穏やかな笑み。

「え、え、な……」

少女はかがみこみ、腰を抜かした久司の手を取った。目を合わせて

笑いかける。

「加賀くん、私ちよつとお出かけするね」鈴を転がすような声で少女は言った。「お風呂はその後でもいいかしら」

「は、はひ…い？」無数の疑問符に脳を支配された加賀は、そう言うだけで精一杯だった。

「私、先生だから。困ってる子を助けなきゃ」

「せんせえ…？え、え？」

「それじゃあ、行つてきます」

少女はそう言つと、窓を開けてぴょん、と飛びだした。這いずるようにして久司が追つと、翠の流れ星が地平線へ向かつて流れていく。窓枠にしがみついたまま、久司はしばし呆然とながめていた。頬がだんだん赤くなる。

「…か、可愛い……」

炎の中で教頭は思い出した。あの子だ。いつも校門で、朝の挨拶をかかさず交わしてくれた子だ。

いつからか笑顔が消え、うつむきがちになり、遅刻気味になったけれど。

少年は覚えていた。担任もクラスの連中も嫌いだ。お父さんはいない。お母さんだって、何を考えてるかわからない。でも、先生だけはいつも、笑顔でおはようと言ってくれた。

《ねエ先生》少年だったものが、黒い炎に包まれていく。《いつシヨに行こウ。僕もう疲れちゃツタ》

「や…め」やめなさい、と言いたいが声が出ない。煙をまともに吸い込んで教頭は激しくせき込んだ。涙がにじんで視界がぼやける。

自殺未遂まで追いこまれた子供に、自分は何も出来なかった。ただ頭を下げるだけだった。

管理職として、一公務員としての役割。全体の為にこの子を犠牲にしていたのだ。

ごめんな。子供ひとり守れないなんて、先生失格だな。教頭は床に崩れ落ちた。焼け落ちた梁が、その上に落ちてきた――

焼け落ちる校舎に翠の流星が突っ込んでいくのを、銀河と紫電は見た。

「プリキュア・ミスト・ハリケーン！」

ひんやりとした風に包まれ、教頭は目を開けた。誰かに抱えられている。

「よく頑張ったわね。トモちゃん」懐かしい、優しい女性の声。そんなはずはないと思いながらも、教頭は彼女に問いかけた。

「カズコ先生……？」

少女は、教頭の焼け焦げた髪をそつと撫でた。

「大きくなったね。こんなに立派になつて。先生嬉しいわ」

40年前と同じぬくもりに、教頭は緊張の糸が切れたまま気を失った。

翠色の風が炎を吹き消す。

「紫電、あれは」銀河が視線を投げるその先。どす黒い煙を振り払うようにして、少女がひとり歩いてくる。か細い腕のどこにそんな力があるのか、気を失った男性を抱えて。

「プリキュアなの！？」「警戒を緩めぬままに紫電が叫ぶ。「その人……もしかして教頭先生！」

少女は抱えていた男性を、そつと地面に下ろす。スーツはあちこち破れ、髪はチリチリと焦げている。すぐに救急隊員が患部を確認し、ほつとしたように頷く。軽傷のようだ。

「私はキュア疾風」少女はそう告げると、漆黒の炎に向けて手の中の鞭を振るう。冷気が刃となって煙を切り裂く。

荒れ狂っていた炎が急激に小さくなり、中心にいるもの――「怨」本体が姿を現した。闇を凝り固めたような、小さな人の形をした悪

意の塊。そのなかに、わずかな光がある。

《チツ…たす…ミンナミチツれに…すけて…》すすり泣くような、絞り出すような声が響く。「怨」の断末魔だ。

「銀河、あの子を助けて」キュア疾風と名乗った少女が言う。「解放してあげて。あの子は何も悪くない」

「ええ。今すぐに」銀河の手に、二振りの刀が現れる。地上に降りた星のような輝きを放ちながら。

「僕はひとりきりだ」膝を抱えてうずくまったまま、少年は泣いていた。「みんなメンドクサインだ。もう楽になりたいんだ」

「そう。それは哀しいわね」

「先生も、おとうさんやおかあさんも。僕なんかいないほうがいいって思ってる」

「それは、ちよつと違うみたいよ」

意識を取り戻した教頭が、救急隊員の腕をふりほどこうとして暴れている。離せ、まだ中に児童がいるんだ。私があの子を助けるんだ。オトナのくせに顔をぐちゃぐちゃにして泣いている。校長先生も、他の先生たちも。あれだけ憎かった、担任の先生も。

警察署で大騒ぎしているお父さん。パトカーに乗せてもらって、おまわりさんと一緒に走り回っている。お母さんはただ泣いている。あの子を返して。二度も奪わないで。お願いだから無事でいて。

「…大騒ぎだね」

「ほんとね」

「何だよ、他人事みたいに。プリキュア、僕を助けに来たんだろ」

「そうね。あなたはどうしたい？あそこに戻りたい？」

「…あんなに困ってるなら、戻ってあげてもいいかも…って思う…」

「そう。じゃあ戻りましょうか」

「…分かった」

眠るように気を失った少年を、銀河はそっと抱きかかえた。その細い体に、空襲のさなか息子を抱えて走り回ったことをふと思い出し

た。

「…面倒くさいなんて思ってるのは、あなただけ。こんなに大勢の人があなたを思ってる」

銀河は、少年から離れた「怨」を睨みつけた。いびつな形の闇が、蠢きながら怨嗟の言葉を吐いている。

《…テ、カイ…シテ、コワシテ…》

「傷付いた心を弄ぶ、極悪非道の怨念よ。あんたの悪事、お天道様はちゃんとして見てらっしゃるのよ！」

二振りの刀が、満天の星を宿したように輝く。

「リフレーションシュ！」

焼け跡から少年を抱えた銀河が現れると、人々は歓声をあげて駆け寄った。紫電はやれやれ、と疲れた笑みを浮かべてチヨコを見、それから疾風を見やる。

「…で、あんたは誰？」

探るようなまなざしを軽くいなし、疾風は微笑んだ。

「さあ、早く帰ってお風呂に入れてもらわないと。加賀くんが待ってるわ」

紫電の目が点になる。

「って、ちょ、ま、ええー！！」

翌日の「やまざくら」では。

リビングは相も変わらずプリキュアの話題でにぎわい、照子はチヨコに新聞の連載小説をせがまれ、由加里はまた寝込んでいた。前とは違う意味で「頭が痛い」らしい。

ただ違うのは、和子の腕に緑色のバンドをあしらった腕時計があること。それに夜勤明けの久司が顔を赤や青に変えながら、チヨコにあれやこれや詰問していたこと。

東京に散った「怨」は、まだまだ残っている。どうなることやら、と照子は首を竦めた。

第5話へ続く

第5話 「遠い日の約束…片翼のプリキュア見参！」（前書き）

おことわり：作中で差別用語が入りますが、第二次世界大戦前という時代設定上、また演出の都合によるものです。何卒ご了承ください。

第5話 「遠い日の約束…片翼のプリキュア見参！」

第5話「遠い日の約束…片翼のプリキュア見参！」

「やーい、やーい、親無しのあいのこー」

「あいつの母ちゃんパンパンだー」

「違うもん、そんなんじゃないもん！」

つぎはぎのモンペ姿の少女は、煤けて真っ黒の頬を拭き叫んだ。

「うげっ、こいつ、混じりモンのくせにしゃべったぞ」

「毛唐のくせに日本語話すんじゃないやねえ！気持ち悪い！」

石つぶてと共に、泥団子が少女の頭を叩く。ボロ布の頭巾がとれる。金髪が泥まみれになるのを見て、子供たちはやんやと喝采をあげた。

「痛いよう、やめてよう…」

「あら、お顔も頭も真っ黒け。少しは日本人に見えるようになったねえ」

「出歩く時はいつもそうしとけ。キンピカ頭が隠れて丁度いいわい」

少女は頭巾を抱えたまま、蒼い瞳からボロボロと大粒の涙を流した。子どもたちは残酷な笑みを浮かべ、更に容赦無い罵詈雑言をぶつけようと近づいた。そのとき。

「お前ら、何してる！」やや低い、よく響くどなり声。子供らの顔色が青くなる。

「またそいつをいじめているのか。いい加減にしろ！」

坊主頭の少年が、太い眉の間に皺を寄せて怒鳴りつけた。突如現れた年長者に叱られ、悪童らはすくみあがった。が、おずおずと釈明する者がいた。少女に泥団子をぶつけた子供だ。

「で、でも…そいつ、まじりもんだから…」

「だから何だ」少年は一喝した。

「そ…それに」別の子供が声を上げた。「敵国の血混じりの癖に、あたしらの村うるちよろして」

「鬼畜米英は倒さなきゃいけないって、学校で習ったんだ」

そうだそうだ、と次々に声があがった。まるで自分たちこそが正義であり、金髪の少女は憎むべき、排除するべき敵だというように。少女は唇を嚙んで俯いた。真っ黒の頬を幾筋も涙が伝う。

「この馬鹿者どもが！」少年が怒りを爆発させた。つかつかと子供らに歩み寄り、手前の子供の襟首をつかみあげた。少女をまさに石打ちにせんとしていた者だ。

ひいつ、と、その子供は絞り出すような声をあげた。取り巻きの子供らは言葉を失う。泥まみれの少女も、驚いて顔をあげた。

「貴様ら、それでも小国民か！」少年は子供を地面に、力いっぱい投げ飛ばした。子どもは地面をゴロゴロと転がる。

「合いの子だろうが何だろうが、これは小さな娘ではないか！銃後の我々がすべき事は、力無い老人や女を守る事だろう！」

投げ落とされて埃と擦り傷まみれになった子供も、それを取り巻いている子供らも、皆ぽかんと口をあけて年長者の演説を聞いていた。無論、泥まみれの少女も。

「それが何だ貴様ら、寄ってたかって弱い者をいたぶるとは！貴様らがやっている事こそ、鬼畜米英の所業と変わらんではないか！恥を知れ！」

まだ文句はあるか、とばかりに少年が睥睨すると、子供らは一様にぶるぶる、と首を振った。這いずるように後ずさり、そのまま尻に帆掛けて逃げて行く。後に残ったのは、泥と煤で真っ黒の少女と、少年のみ。

地面にうずくまったままの少女に、少年はつかつかと歩み寄った。少女が怯えた目を向ける。

と、少年は腰にゆわえていた手ぬぐいを外し、そっと少女の頬を拭ってやった。少女は目尻に涙を浮かべ、されるがままで震えていた。

「怪我は無いか」先ほどとは全く違う、気遣うような声。少女はおどと相手の様子を窺っていた。どうやら敵意は無いらしい。

「狭い村だ、馬鹿な輩が下らない事を吹聴しているのだろう。だが、お前のような娘が私刑に遭う謂われなど無い」

「…ごめん、なさい…」小鳥がさえずるような細い声で、少女が言った。

「何を謝る必要がある」少年はニコリと笑った。太い眉がハの字に開き、いかにも人好きのする笑顔だ。「悪事を働いた訳でもないのに、自分から罪人になる必要など無い。堂々としていなさい」泥と煤を払い落とすと、少年は少女に手を差し伸べた。

「立てるか？」

太く短い指に、タコと切り傷だらけの手のひら。

母親以外の人間から、初めて差し出された手。

あかぎれだらけの少女の手が、ぎゅっとそれを握った。

目覚めは、いつもより遅かった。

柄にも無く二日酔いか。ナツは、ガンガンと響く頭を押さえてうとうとめいた。プラチナブロンドの髪はあちこちでこんがらがっている。

しわがれ声で彼女はうめく。

「…ったく、今更出てくんじゃないよ。さっさと逝っちまったくせに」

「おいチヨコ、お前、昨夜また抜けだしたろ。幽霊騒ぎはもうごめんだぜ」

『騒いでいたのは貴様一人だ。私は情報収集をしていただけだ』フン、と鼻を鳴らすチヨコ。『それに私の名は中島昌史、帝国海軍少尉だ。小間使い如きに犬扱いされる筋合いは無い』

「犬は犬だろ！大体、チヨコ本人はどこ行っただよ！？」

『私には判らん』カカカ、と後ろ脚で首筋をかくと、チヨコは、もう相手にもしたくないという風情で踵を返した。『第一、プリキュアの資格が無い貴様など、何の役にも立たぬ』

チヨコの声が聞こえた。つまり久司にもプリキュアの資格があるかもしれない。皆期待を寄せた。が、チヨコの体内に2つ残されているエネルギーは久司に何の反応も示さなかった。

「だいたいプリキュアとか「怨」とか、TVの中の話だろ。そんな事いきなり聞かされたって…もう俺はどうしたらいいんだよ」

『そんな事は知らん』そっけなく言い放つチヨコ。が、そこで一旦振り向き、牙を見せる。

『貴様この事を口外するような真似…』

「しねえよ！」流石にこれには久司もカチンときたらしい。チヨコの首輪を掴み、顔と顔を近づける。無礼を働かれたチヨコも鼻筋に皺をよせ牙を見せたが、久司はひるまない。

「ええと、中島少尉、俺は仮にもこの介護福祉士だ。小間使いじゃない。俺には入居者の快適な生活と安全を守る義務がある、それは判ってくれ」

『だからプリキュアをやめると？』

「…できればそうして欲しいし、あんまり騒ぎを起こすようなら、あんたをお被いしてもらう」

『何をしようが無理だ。今の軍事力では「怨」を倒すことは出来ない。プリキュアによる浄化が唯一の対抗手段なのだ』

「ならせめて俺にも手伝わしてくれ、いや、ください！超能力は使えないけど…えーと、空手なら何とか！」

ほら、と腕をまくりあげ、力瘤を作って見せる。なるほど確かに腕に自信はあるようだ。

チヨコはしばし考える。確かに犬の自分は行動が制約されている。が、こやつを使えば効率的に照子たちの手助けが出来るだろう。丁度、手足となる部下が欲しいと思っていたところだ。少々頼りない

が、まあいいだろう。

『…そこまで言うなら使ってやってもいい。が、ひとつ条件がある』
「な、何です」

『おひさまテレビ所属の小島ひかるアナウンサー、彼女の写真集を買ってこい』

「パシリかよ！」

白衣の医師と看護師が出ていくと、照子と由加里は入れ替わりに和子の部屋に入った。相変わらずの笑顔を浮かべて、和子がお茶をすすっている。二人の姿を認めると和子は戸棚から湯飲みを二つ出した。

「和子ちゃん、大丈夫だった？」由加里の車椅子に掴まって、よしよ、と照子は椅子に腰かけた。その隣に由加里も車椅子を停める。「おつかしいのよ、お医者さんしたら」コロコロと笑う和子。腕には緑色の腕時計、キュアクロックが光っている。「どこも悪くないのに、ずっと変だ変だっておっしゃるの」

失礼極まりない とipadを差し出す由加里は、何やら憤っているようだ。あの医者嫌い

「まあまあユカちゃん。それで、お医者さんは何て？」と、なだめつつ照子が尋ねる。その間に和子は二人分の緑茶を淹れ、テーブルに置いた。

「難しい事は分からないわ。でも私、ここにいてもいいそうよ」
湯気が立つそれを勧めながら、和子は嬉しそうに微笑んだ。左手のキュアクロックをそっとさする。

「不思議な事もあるのね。こんなおばあちゃんがプリキュアなんてものになっちゃったんですもの。体も頭も軽くなって、なんだか極楽にいたような気分だわ」

いやマジで極楽行かないでね

「この歳になって、まだ世間様のお役に立てるのは嬉しいわよね」
と、湯気をたてる茶を片手に照子がつぶやく。「またあの人にも会

えたんだし」

「ごちそうさま」と、同じく茶をすすりながら由加里。
と、ドアがノックされる。どなた、と和子が呼びかけると、久司の
声で返事があった。

「ちよつと失礼しまゝあれ、皆さんお揃いでしたか」

「あら、加賀くん。それにチヨコちゃんも」久司の後ろからチヨコ
もひょつこりと顔を出す。こちらへどうぞと和子が微笑むと、久司
の面持ちがこわばった。心なしか顔が赤い。ははあ、と由加里が一
人ほくそ笑む。

久司はドアを閉めると、つかつかと老婆たちの元に歩み寄る。何事、
と構える照子。こらえつつも口の端が上がってしまう由加里。

先日の戦いが終わった後、「やまざくら」に帰還した彼女らを待つ
ていたのは、顔面蒼白の久司だった。部屋に降り立った袴姿の少女
らを見て赤面し、元の姿に戻った3人を見て震えだす。騒ぎだそう
としたところを、チヨコが念動力で押さえたのだ。プリキュア
の秘密を共有する一人となった彼が、今になって何の用だろう。照
子は夫に視線を向けるが、テレパシーは帰ってこない。

と、久司が斜め70°に頭を下げた。板前のようなつんつん頭が3
人の目前に迫る。

「ど、どうしたの、加賀くん？」と照子。入れ歯を抜いたようにぽ
っかりと口を開ける由加里。流石にこの行動は予想していなかった
ようだ。そして、変わらず微笑む和子。

深々と礼をしたまま久司が言う。

「どうか、皆さんの手助けをさせてください！戦いでもアリバイ作
りでも何でもやります！」

『…彼なりに我々の手伝いがしたいそうだ。こんな奴でも何らかの
戦力にはなろう』と、隣のチヨコも言い添える。

「加賀くん、無理しなくていいのよ」ほら、と頭を上げさせようと
する照子。「うちの人から聞いたでしょ？「怨」と戦えるのは、私
たちだけなの」

「戦うのは無理でも、せめて何かさせてください！」頑として頭を上げない久司。「お年寄りだけ戦わせて見てるなんて、俺にはできません！」

「でもね加賀君」

「俺だって、いえ、自分だって日本男児です！」がばつ、と久司が体を起こす。そのまま正面にいる和子の小さな手を握る。あらら、と目を丸くする由加里。チョコはその隣で目をしかめている。

「皆さんを守りたいんです、どうか自分にもお手伝いさせてください！」

しばしの沈黙。照子は困ったようにチョコを見るが、チョコは黙って首を横に振る。

と、和子の手を握り締めたままの久司に、由加里が近づく。その肩をつついて振り向かせると、筆談用のipadを見せた。

そこに書かれている文を見て久司は凍りつく。どれどれ、と覗き込んだ中島夫妻は互いに顔を見合わせ、苦笑する。

先ほどキミのケータイ見て、疾風の待ち受けを確認した。目的は分かっている

久司の顔がゆでダコのように真っ赤になっていく。

和子は独身だ、せいぜい頑張れ

分かっているのかいないのか、相変わらず和子はニコニコとほほ笑んでいる。

『…茶番はさておき本題に入ろう』

「俺のは無駄話かよっ」

『これまで「怨」を浄化してきた分、人々の希望の力が高まっている』久司を無視してチョコが淡々と述べる。『以前説明したが、プリキュアの力の源は希望、喜び、そういったものだ』

「そうすると、どうなるの？」小首をかしげる和子。

『付属的な能力だが、変身せずとも若返ることができる』

「あらまあ、それは便利」照子が目を輝かせる。「…だけど街中を

歩いてたら、プリキュアだと分かつちゃうんじゃない？」

『まあ聞け』茶が冷めるのを待ちながら、チョコが続ける。『若返るといっても、その時の体調によって制限はある。具合のいい時は若者にもなれるが、力の消耗も早い。無理をするとすぐに戻ってしまっただろう』

「何でそんなオプシオンがあるんです」と久司。「マジで、プリキュアって一体何なんです？」

『だから私は開発者でないから詳しくは知らん。恐らく偵察用の補助機能だろう』

例えば私が30歳ぐらい若返ると、どれぐらいもつ？体の不調は治るのか？興味津津の目で由加里が食い付く。

『そうだな…体調によるが、今のエネルギー量ならば一日程度は大丈夫だろう』チョコはうんうんと首を捻って考えている。『病気や障害は若返った時点で消えるはずだ』

「じゃあ、若者にならないければ、プリキュアとは分らないわね」と、ぼんと膝を打って、和子が言う。「夢のような力ね」

「若者にならないんですか…」残念そうにひとりごちる久司。が、由加里の何かを察したような視線が突き刺さった途端、また黙り込んだ。

『そうだな。…む、このほうじ茶は上等品だな』と、皿から茶を飲みながらチョコ。犬の体でも茶の味が分かるらしい。

「…そうだわ、お茶と言えばお菓子！」はた、と手を打って照子が声を上げる。「私、立花さんにお詫びの品を買わないといけないのよ」

ネット取り寄せしなかったの　と、由加里。でも買い物楽しそう

「あなた、早速だけど私、お出かけしたいわ」皺の奥で照子の目が輝く。「渋谷のつつじや、あそこのどらやき、覚えてる？」

『ああ。出征する前の日にお前が買って、持たせてくれたな。あれはうまかった。艦の中で、そして死んだ後も何度思い出したことか

…」

年功序列、照子から行くのに賛成　ぴしゃりと打ち切る由加里。
そろそろ止めようとしていたところだ。　でもどうやって言い訳を作る？

「そ、それについては俺が！」さつと拳手をしたのは久司。「俺の出番です！」

とっておきのワンピースに着替え、お気に入りの帽子をかぶった照子は、裏口からそつと施設を抜け出した。それを見送るとすぐに、久司は由加里の部屋へと向かった。手にはケータイを握り締めて。

「紫電さんへ報告！銀河さん出勤されました！発見された様子、ありません！」

芝居がかった口調に呆れながら、由加里はパソコンのフォルダを開いた。久司からケータイを受け取ると、ケーブルで接続する。そのまま手際良くデータを転送していく。

「うわぁ…こんな、そんな画像まで…」

まあ身内だから　パソコンのメモ帳を使い、由加里が返事をする。「テレビや雑誌じゃこんな見たこと無いっすよ…うわ、これいいんスか？」

犯罪でも盗撮でもないから安心しろ

モニターに映っているのは、満面の笑みを浮かべたキュア疾風、鞭を手に凜々しく身構える疾風、柔らかく微笑む疾風。記念にと言つて由加里が撮影したものばかりだ。もっとも何重ものパスワードに守られたフォルダに保存されており、由加里自身こんな事に使うとは思ってもよらなかったが。

銀河とあたしのは？

「銀河さんのは欲しいけど紫電さんは別にいいっす」

世辞ぐらい覚える厨房

「ひいひい…あれ、風祭さん、中島少尉！ちよ、隠して隠して！」

開きっぱなしのドアから二人が入ってきた。慌てて由加里はデスクトップを切り替える。

『照子は無事に出かけたようだな…何を慌てている』

「い、いえ、別に…お二人こそ何を？」

「由加里さんはどこにも行かないの？」と、和子。

体力温存。カズコこそいいの？　i p a dに持ち替えて由加里が答える。

「私は、今日はいいの。でも…そのうち、お池の散歩に行きたいわ」「お池？」お宝データが詰まったケータイを隠しつつ、久司が尋ねる。「どこかの公園ですか？」

「ぼっちゃん池って呼んだのよ」柔らかに微笑んで、和子が答える。「バンカラは怖かったけれど、時々、文士さんとお会いしたり、お話したり。懐かしいわ」

『帝国大学！』チヨコが目を丸くする。『これは驚いた、いや失礼した』

東大か… 啞然として、由加里。

「え、風祭さん東大出！？」チヨコ以上に目をまん丸にして、久司。

「そんで確か先生だったって…」

「あら、坊っちゃんのお池はどこにあつたのかしら…」

『人は見かけによらぬものだ』と、チヨコ。

『そう言えば、下の応接室に嗅ぎ慣れない臭いの人間が来ていたぞ』ほら、と窓の外に視線を投げて、チヨコ。『金髪の婦人…黒井さんを連れて出かけて行ったが、彼女は大層な資産家のような。黒塗りの高級車に運転手までついていた』

ナツの店の若い連中らしい。時々ああして出かける

「それで裏口が手薄になってたんですよ」と、久司。「月に何回か、あんな感じで」

『女どもがかしましく騒いでいたのはそのせいかな』チヨコはどこか不愉快そうだ。『昨今の娘はあんな優男が好みなのか。あんな軟弱者、いざという時に頼りなさそうだ』

いざという時戦死してた奴に説得力無し　ふん、と由加里が一瞥する。

チヨコはがっくりと尾を垂れた。返す言葉も無い。

「ありがとうございますー」

口紅を眺めていた照子は、暇を持て余した化粧品売り場の販売員に声を掛けられた。こんなおばあさんに、と固辞する照子を捕まえた販売員は、あつという間に照子をメイクアップさせてしまう。淡いピンクの頬紅に薄いアイシャドウ、眉毛はきちんとカットされ、目の下のしみも見事に消されてしまった。そして最後に、発売されたばかりの新色だという口紅を差される。若い頃から化粧などほとんどしてこなかった照子にとっては、おかめになったような気分だった。しかし「女優の誰それにそっくりですよ」「十歳は若返りました」などと言われると悪い気はしない。一番小さな口紅をひとつ買うつと、浮足立った気分ですぐ店を出た。

戦死した昌史の遺族年金も含め、生活に困らない程度には貯金がたまっている。せっかくの機会だ、少しくらい若者気分を味わうのも悪くない。60歳に若返った照子は、軽い足取りでウィンドウショッピングを楽しんでいた。

女手一つで生きてきた照子にとって、遊びで金を使うなど全く経験が無いことだ。流行りの服や食事など全く知らないまま91歳まで生きてきたが、まさかこんな形で人生を楽しめるとは。流行のカフェで横文字のメニューに戸惑ったり、貴金属店のショーケースに並ぶ数字を見て面食らったりと、照子は時間が経つのを忘れて渋谷の街を散策した。

「あら、つつじやはこっちははずだけど…」

目的の和菓子屋を探して、照子は街中の路地に迷い込んでしまった。細い裏通りに小さな店がひしめきあっている。看板はどれも横文字ばかり、ここは本当に渋谷なのか。自分が知っている渋谷とは全く

違う。照子の知る渋谷にはこんなに高い建築物は無かった。

右往左往していると背後から若い娘の声がした。

「どしたの、おばあちゃん。もしかして迷った？」

明るい茶色に染めた髪、耳にはいくつもピアスがぶらさがっている。年のころは十代後半だろうか。照子には理解できないセンスの服装をした娘が、心配そうにこちらを見ている。奇抜な外見とは裏腹に、その声色は優しいものだ。

「え…ええ、そうです。道に迷っちゃって」

「どこ行きたいの。知ってる所だったら案内するよ？」

「あ、あの、つつじやっていうお菓子屋さん。知りませんか？」

娘はしばらく考えると、ちよつと待ってね、と背後の店に掛け込んだ。ほどなく戻ってきた彼女はそのまま、照子の手を取った。

「ごめんねおばあちゃん、ちよつとこつち来てくれる？」

と、ぐいぐいと引つ張られ、照子はその店に入ってしまった。洋服店というには狭く、物置のようなその空間には、服や装身具などが所狭しと並んでいる。娘は商品が陳列された机をざつと空けると、何やら紙きれに書きだした。照子もそれを覗きこむ。

「できた！」

娘は簡単な地図を書いてくれたのだ。

「ここが、この店。今いる所ね。で、この道をまっすぐ行って。セブイレブンの交差点を右に行って。そこからは道なりに行けば看板出てるはずだから」

ボールペンの先で辿りながら説明する。ゆつくりと大きな声で、聞き取りやすい口調だ。商売柄、年寄り慣れしているのだろうか。しかしこの店はどう見ても若者向けだ。

「ありがとうございます」地図を受け取ると、照子は深々と頭を下げた。と、後ろでまとめていた髪がはらりと落ちる。ヘアゴムが緩くなっていたようだ。

「あら…えつと、ちよつと待ってね」娘は先ほど寄り分けた小物の山をかき分け、しばし考えた後、布製の髪留めを取り上げた。星

の飾りがついた、柔らかい黄色をしたシュシュだ。

「ちよつとじつとしててね」と、あつという間に娘は照子の髪をまとめあげ、付け根を黄色いシュシュでふんわりと飾った。白髪混じりの髪に黄色い花が咲いたようだ。

「よし、似合ってる。あたしのセンスに間違いは無い」

「え、ちよつと待って…私あんまりお金は」

「そんなのいいって」娘は満足げに照子を見やり、うんうんと微笑む。「これね、あたしが作ったの。店に置かせてもらってるんだけど、なかなか売れなくて。でもこれも何かの縁ってやつ？貰ってよ」

ほら、と姿見の前に引つ張り出される。ベージュに近い黄色が、照子の浅黒い肌に柔らかな印象を与えている。

「今話題になってるプリキュアっての？あれイメージして作ったの。紫と緑もあるんだけど、おばーちゃんには黄色が似合うと思って良ければ付けてってよ」

「あ…」思わず顔が赤くなる照子。「…ありがとうございます」

「でもねー」と、娘は腕を組む。「あの衣装、あれワタシ的にはちよつといただけないわー。女学生スタイルってのはいいけど、ひねりが無さ過ぎ。もつとこつ、動きやすく裾を短めにするとか、生地だつてもつと透け素材とか」

「あ…ありがとうね」面と向かつてプリキュアの話をするのは流石に照れる。照子はまた深々と頭を下げた。「素敵な髪飾り、大事にしますね。ええと…」

と、娘の胸元にある名札を見た。シールや小物で飾られたそれには、丸っこい平仮名で彼女の名字と思しきものが記されている。

「あ、あたし、さくら。さくらっての。また来てね、おばあちゃん」さくらと名乗る娘の人懐っこい笑顔に、照子はどこかデジャヴを感じた。ひ孫の一人に似ているからだろうか、と。

昼間の歓楽街は、どこか落ち着きが無い空気を漂わせている。

黒服たちも所在なさに日陰に腰を掛け、互いに情報のやりとりをしたり、タバコをふかしたりとめいめいに時間を潰している。

「……たく、相変わらず暇そうだねえ。あの子たちも」

オールドファッショングラスの氷は、既に半分の大きさになっている。ナツが残りのウイスキーを一気に飲み干すと、バーテンダーが音も無く現れて回収する。

「次はいいよ。歳取るとあっちのほうが近くていけないね」

「畏まりました」

「で」と、ナツが傍らの箱から葉巻を取り出すと、隣の若い男が先端を切り落として火を付ける。うまそうに一口吸い込む。「馬鹿共は減ったのかい」

薄暗い店内に紫煙がたなびく。

「……売人の検拳数は増えましたが、今度はヤクの種類がまた……」向かい側に座っている眼鏡の男が、眉根にシワを寄せて言う。

「……そりや何だ、結局どうにもならんって事かい」ふう、と煙を吐き出す。「こいつぁ本気で、害虫駆除屋にでも頼むかねえ」

「……あの、奥様。血圧が心配ですしお煙草は控えるようにと医者が……余計なお世話だよ」と、またそれを深々と吸い込み、うまそうにゆっくり吐き出す。「分煙にや協力してんだ、テメーの体ぐらいテメーの自由にさせろってんだ」

クリスタルガラスの灰皿にそれを押し付け、やれやれ、とナツは天井を仰いだ。大きなファンが音も無く回転し、灰皿から昇る煙を吸い込んでいく。

「お廻りとは仲良くしてんだろうね」

「ええ、勿論」向かいの男が答える。「ミカジメの事もありますし。情報交換しつつ連中のアタマを追っかけているところです。本庁の組対からも近々応援があるそうで」

「近々、ねえ」ナツが目配せすると、グラスを磨いていたバーテンダーが黙って頷く。「トカゲの尻尾で満足して帰ってくような役立

たずなら、御遠慮願いたいもんだね。…で、新手のクスリって何さ」
ナツの前に再びグラスが置かれる。薄い琥珀色のそれを、ナツはふん、と一瞥する。

「マツカランあったろ。あれ持ってたきな」

「生憎12年しかございませんが」

「それでいい」

「これまでに次回っていない種類でして」と、ずり落ちかけた眼鏡を直しながら男が言う。「切手型の所謂LSDですが、やたら毒性も値段も低いもんで。子どもの小遣いで買える程度です」

「一昔前に流行った合法ドラッグみたいなもんか」

「どちらかというと…栄養剤、サプリメントに近い感覚で流通しているようです」グラスの水を一口飲むと、男は続ける。「アッパー系で効果は1、2時間。依存性は無いってのが妙なヤクです。こいつはツレのサツからの話なんですがね。尿検査にも出ない程軽いシロモノなんで、気軽に使えるとかでガキ共に広がってるそうです。都内の高校じゃヤクとは言わずに、ダイエットサプリとか何とか呼んでるそうです」

「馬鹿が勝手にダイエットすんのはいいけどさ」と、運ばれてきたマツカランを傾けつつナツが言い捨てる。「うちらが発端とか言われるのは願い下げだねえ」

「所轄も同じ事を言っていましたよ。本庁はさっさと事を片づけたいらしく、我々をスケープゴートにしかねないって」

「そいつあ本格的に面倒だ…ん、マツ。どうした？」

店の入り口が開き、運転手の男が入ってくる。誰かを連れているようだ。

「…あら、ナツちゃん？」

ナツは腰を浮かせた。乱暴にグラスを置き、目を見開く。

「て、照子！アンタなんでこんな所に？」

目当てのどら焼きを買ったはいいが、寄り道をしすぎ、散々歩きまわって照子はフラフラだった。初夏とはいえそろそろ日差しも強くなってきている。喫茶店にでも入って休もうか、しかし金もったいない。「やまざくら」に帰ろうか。でもバス停はどこだろう。地下鉄の乗り継ぎも複雑すぎてわからない。タクシーに乗ったらまたお金が…。

そうこうしているうちに、ポケットの中のキュアクロックがブルブルと振動を始めた。若返りの効果が切れる合図だ。予想以上に体力の消耗が激しいようだ。

誰かに見られたら大変だ。慌てて照子は裏通りの物陰に隠れた。途端に照子の体を金色の光が包む。60歳の体が91歳に戻っていく。足から力が抜け、腰が曲がる。

「あ、あ…」

よろよろと照子はまろび出て、道端で尻餅をついた。そのまま地面にぺたりと座り込んでしまう。

「…どうしたら…」

通行人は不審そうに照子を見るが、誰一人手を差し伸べようとはしない。立ちあがろうとしても、足に力が入らない。

「やまざくら」に帰れない。どうしよう。

途方に暮れている照子の腕を誰かが取った。そのままぐい、と引っ張り上げられる。

ひ、ひったくり！

声なき声で悲鳴をあげる照子、しかし相手に害意は無いらしい。

「おい、ばあさん。大丈夫か…あれ、あんた…」

黒っぽいスーツの男は、まじまじと照子の顔を眺めた。

「…まっちゃん？」

男は一瞬ぼかんとして、それから満面の笑みを浮かべた。

「中島食堂のおばちゃん！」

「いや、まさかおばちゃんが奥様の友達とは」まっちゃんことマツは、嬉しそうに照子のグラスにジューズを注ぐ。「世間つてのは狭いなあ」

「まっちゃんも立派になったねえ」差し出されたおしぼりで首筋を拭きつつ、照子は笑う。「ごめんね、黙ってお店畳んじやつて」

「老人ホームに入ってたって話は聞いてたから、ずつと探してたんだ。しっかしおばちゃん、こんな小っちゃくなっちまったんだなあ。俺も歳取る訳だ」

あはは、と笑うマツ。まっちゃんというあだ名が全く合わない高級なスーツに、どこかのブランド品のネクタイ。短めに刈り込まれた髪には、ところどころ白髪が見え隠れしている。

ここではなんだから、と、ナツに連れられて照子が来たのは、歓楽街の真ん中にあるホストクラブ。黒塗りの高級車のドアが開くと、照子の面前に整った顔立ちのホストたちがずらりと並んで出迎えた。目を点にしている照子に、ナツは観念したかのような溜息について説明した。

「…実言うとさ。アタシの店つてのはね、ここいら一体に卸やつてる酒屋なんだ。んで、面倒事を仲裁してるうちに、顔役だか何だかにされちまつたつて訳」

「か…顔役？」

「細かい事は置いて、茶でも飲んでつてよ。若い衆適当に使つていいからさ。無断外出なんかやらかして。疲れてるんだろ？」

いつのまにか自分は家出した不良老人にされているらしい。詮索されずに済んだのは有難いが、繁華街どころかこんな店に来たのは初めてだ。右往左往しているうちに車椅子に乗せられ、店の奥へと運ばれる。何もかもがきらびやかな室内に、照子は目を白黒させた。宝石のように輝くシャンデリア、グラスで造られた塔。物語に聞く外国の城のように、照子の目にはそれらが映った。

ふかふかのソファに腰掛けた照子の周囲では、整った顔立ちのホストたちがあれやこれやと世話を焼いている。果物の盛り合わせを勧

めるもの、軽食を運ぶもの。トレー一杯に様々な飲み物を用意するもの。皆、照子のひ孫とそう変わらない世代だろう。

「痛くありませんか、照子さん」さっきから照子の肩を揉んでいるホストが尋ねる。「良ければ足のほうもマッサージしましょうか」

「い、いいえ。肩だけで十分。とっても気持ちいいわ」恐縮しつつ照子が答える。「肩もみなんて久しぶりだね。あなた、慣れてるのね」

「いいえ」茶色い髪をウェーブにしたホストは、笑窪を見せた。「俺、ばあちゃん子だもんで。肩もみすんの久々なんです」

「あら、そうなの。優しい孫さんを持って、幸せなおばあさんね」
「…最近全然帰ってないから、寂しがってるかもしれませぬ」

「俺もじいちゃんに育ててもらったんです」と、その隣のホストがつばやく。「今でも野菜送ってくれるけど、食べきれなくて」

「俺いつもアレで食いつないでるんだぞ」と、また別のホスト。「お前の差し入れがなきや今頃俺達干からびてるって」

「そのうちじいさん連れてこいよ。俺達で孝行すつから」
「俺のばあちゃんなんて現役でリング作ってるぞ。青森で。すっげーうまいんだからな」

「後継げよな、この不良孫が」

自分の祖父母自慢が次々と飛び出す。とてもホストクラブとは思えない雰囲気だ。

「おい、お前ら」と、困った顔でマツが口を挟む。「主賓ほったらかすホストがどこにいる」

「いいのよ、まっちゃん」照子は嬉しそうにホスト達を見渡す。どの青年もみな心から嬉しそうな笑顔で祖父母自慢をしている。出迎えるの時に見せた作り笑顔など、全くない。「私ね、嬉しいのよ。こんなに優しい子に囲まれて。まっちゃんが立派になって。掘立て小屋みたいなお店で、具の無いうどんと一緒に食べた子が、今じゃこんなに大勢の子たちのお父さんになって」

「お父さん、って…」と、照れたようにマツが頭をかく。

照子の脳裏にはある風景が浮かんでいた。工場の煙が空を覆う下町で、トタン屋根の小さな食堂を営んでいた頃。肉体労働者に混じってやってきた、アバラの浮いた痩せっぽちのイガグリ坊主。行き倒れかけていた所を拾い、二人の息子と同様に食べさせ、住み込みで働かせたこと。常連の金貸し社長が、懸命に働くその姿を見染めたこと。

「ほら、初めてのお給料が出たって、私にハンドクリームをくれたでしょ。あの缶、小物入れに使ってるのよ。もったいなくって」

「あんな何十年前も前の…」

「社長かつこいいつすね」すっかり気を許したホスト達から、やんやと冷やかしが飛ぶ。

うるせえ、と茹でダコのように顔を赤らめるマツ。

「あら、あなた社長さんなの」

「ええ」と、また頭をボリボリとかく。「ヤクザな商売なんで、おばちゃんに自慢できるような話じゃないんですがね」

「まっちゃんが悪い人だったら、この子たちこんなに楽しそうにしてないわよ」ね、と照子が周囲を見回すと、ホスト達もうんうん、と頷く。

「万事なるようになるのよ。良い事も悪い事も、ちゃんとお天道様は見てらっしゃるんだから」

あ、それは、と、ホストの何人かが顔を見合わせる。

「プリキュアみたいっすね」

「ぶ、プリキュア!?」一瞬間をおいて、照子はしまった、と心の中で焦った。

「ほら、今話題になってる女の子。すっげー強くてすっげー可愛いんです」

「あのほら…髪の長い子、渋谷に出た」

「キュア銀河!その子の決め台詞ってのがその」

「お天道様は見てるのよ、だよな?」

再びうんうん、と頷く一同。

「照子さんぐらいの歳でも知ってるって、やっぱ人気あるんですね」
「え、いえ、私は…」言い淀む照子。先ほどの店員といい、まさかここまでプリキュアが社会一般に認知されているとは。ケアハウスの中と世間とのギャップを、照子は改めて思い知った。無事に帰ったら由加里たちにもこの事は伝えておかないと。

「お前ら…」と、あきれ顔でマツ。「昔から言うもんだ、お天道様が見てるから悪い事はできんってな」

思わぬ助け舟に照子はほっと息をつく。

「そうなんすか？」

「おばちゃんのお癖だもんな。俺もそう言われて育ったもんだ」

「そーだったねえ。アンタ何かあるとソレ言ってたけど、ありや照子の受け売りだったか」

もつともらしく言ってから、マツは思わぬ乱入者に慌てて振り向いた。ナツだ。

どっこいしょ、とソファに深々と腰を掛け、ナツは照子のグラスにジュースを注ぐ。

「悪いねえ、氣い使わせちゃって。ウチの若い連中が粗相してないかい？」

ふるふる、と照子は両手を振った。

「とんでもない。みんな優しい子ばかり。こんなに良くしてもらって勿体ないくらいだわ」

御馳走も食べきれない程だし、と、照子は少し困ったようにテーブルを見回す。

「帰りに包ませるよ。しっかし照子、アンタも随分冒険するじゃないか。よくもまあ一人でこんな遠くまで来たもんだ。マツが見つけなかったら今頃病院送りさね」

見直しちまったよ、とカラカラと笑うナツ。

「ごめんね、ありがとね。どうしても欲しい物があつたから…」

「まあいいさ。今日のことはお互い、ハウスの連中にや秘密ってことで。いいかい？」

「もちろん」

いたずらっぽく、蒼い瞳を細めるナツ。と。

ドン、という衝撃音。入口の方から叫び声が響いた。

「爆発だ！誰か、救急車を！」

ソファの背を掴んでナツが立ち上がった。その目はもう、笑っていなかった。

その数分前。

夕暮れの路地裏で少女がうずくまっている。腹を押さえ、激しくえづいている。

…こんな、はずじゃ…

彼女の手から何かがこぼれ落ちる。黒い染みのついた切手大の紙。

「ブラック」とか「黒サプリ」とか呼ばれるそれを、彼女は昨日、売人から千円で買った。

「…前のより効く代わりに、少しだが副作用がある」フリーターのような風貌の売人は、そう言って彼女にそれを渡した。「最初は少しキツイけど、それを越えたら気持ち良くなるから」

「ヤバいんなら買わないけど」と、暗にいつものクスリを要求するが。

「あれはもう売らない」

「何で!？」

「だってもう、サプリじゃ満足できないんだろ? だったらもっといいのにしときなよ」

「いい。別の人に頼むし」と、踵を返そうとした。だが、その背中に売人が残酷な事実を告げる。

「もう誰も、サプリは扱わない。みんな飽きちゃったから」

「はあ？」

「君だって内心、もっと凄いの欲しいって思っただろ? だったらいいじゃないか。値段は同じ、効き目は倍増」

「…だって、そんなのクスリと変わらないじゃん。犯罪とかマジ嫌だし」

「何を今更。サブリという名前のクスリやつといて、今更怖くなつたのか」

「だっ…だって」

「N高の男の子たち」と、売人はあさつての方向を向いた。「5人ぐらいかな？さっき1万円分ずつ買ってたよ。その前はC女子高のグループ。別のバイヤーには…」

「千円」と、彼女は札を突き付けた。「千円分だけ買う。また明日もいるよね」

売人はほくそえんだ。さっきの話は嘘ではない。彼女らはみな犯罪より副作用より、仲間外れ、そして流行遅れになるのが怖いのだらう。

千円札と引き換えに、少女は黒い染みのついたシートをひつたくるように奪い取り、スクールバッグに突っ込んだ。周囲に誰もいないことを確認して走り去る。

売人は、まいどあり、と呟いた。と、その姿が煙の如くかき消える。そして今。呻き苦しむ少女の頭上、商業ビルの屋上に彼はいた。沈みゆく夕陽を背にタバコをくゆらせている。眼下の街は、ネオンがあちこちに灯り始めていた。夜が近い。

「…頃合いか」

売人はタバコを捨てた。それは煙を纏わせながら、ネオンの街に落ちていく。

直後、闇が爆発した。

同時刻、「やまざくら」にて。

帰りの遅い照子を心配していた由加里が、はっと顔を上げた。同時にチヨコの声が頭に響いてくる。

『川西さん、風祭さん、聞こえるか。「怨」の気配だ』

わかつていいる。由加里はそのままパソコンに向かい、情報収集を始めた。

リビングでテレビを見ていた和子も、ゆっくりと立ち上がり由加里の部屋に向かった。廊下ですれ違った立花香里が、ふと振り返る。

「…どうしたの？」と、にこりと笑う和子。

「…いえ」けげんな顔の香里。和子は全く気にせず、そのままその場を去った。

一人残された香里は、何かが引つかかったような顔のまま立ち尽くしている。

繁華街の中心で爆発したそれは、圧倒的な闇の奔流となって街に流れ出した。炎のように速く、泥流のように暗いそれは、そろそろ活気を見せはじめる街を、人を、ネオンを飲み込んでいく。

「何事だい！」杖をつきながらナツが店の表に出る。

「わかりません。が、既にサツにや通報済みです」黒服のひとりが駆け寄る。「多分火事でしょう、奥様は奥に…ええ!？」

「…何だい、ありゃあ…」

黒服とナツは、その場に立ち尽くした。入道雲のような闇の塊が、暮れの夜空にもくもくと盛りあがっていく。火事の黒煙ではない、墨汁を固めたような真っ黒いなにか。雲が発達する様子を早回しで見るとこうなるだろうか。その得体の知れない物体が、繁華街の上空を覆い尽くす。

「…空襲…」うわごとのようにナツが漏らす。と。

闇の塊がぶるぶる、と蠢く。一瞬動きが止まったかのように見えた。その直後。

それは、まるで軟体動物が触手を伸ばすようにナツたちに襲いかかってきた。すくみあがったまま、ナツも黒服も蛇のような闇に絡めとられる。圧倒的な力で宙に投げ出され、さながらクモの巣にかかった虫のように、がんじがらめにされる。闇の塊に飲み込まれる。

あまりの衝撃と恐怖に、もう悲鳴も出ない。

闇に包まれる直前にナツは、自分の街を見下ろした。男も女も、若者も年寄りも、悲鳴をあげて逃げ惑っている。

それはナツの脳裏で、とある光景と重なった。

炎の中を逃げ惑い、次々と焼かれていく人々。油と人の焼ける臭い、むせかえるような黒煙。焼夷弾が炸裂する轟音と地響き。

焼き尽くされた街と、河畔に折り重なり倒れる人間の群れ。焼け焦げて千切れた体。

遠くからサイレンのうなる音が聞こえてくる。ナツは闇の中で必死でもがいた。助けないと。あの子たちを守らないと。不自由な左足が痛む。自分を絡め取ったものが体をぎゅうぎゅうと締めつける。

骨がきしみ、血が沸騰する。意識が薄れていく。ナツは奥歯を食いしばった。その口の端から、ひとすじの血がにじみ出す。

…あたしは、また何も守れないのかい…？

最後に浮かんだのは、太い眉をした青年の顔だった。

『お前を虐める奴がいたら、俺が許さん。何があってもお前を守ってやる』

銀色の翼を広げ、東京上空を滑空する紫電、疾風、そしてチョコ。

歌舞伎町と原宿、新橋で同時多発テロという情報を得て出撃した彼らだが、肝心の照子の不在に焦っていた。

「ちよつと中島さん、本当に照子が歌舞伎町にいるの!？」紫電がいらだつ。

「落ち着いて」と、冷静に疾風。「それが本当なら、まず歌舞伎町へ向かわないと」

『近づいてきてよく分かる、照子の気配は歌舞伎町方面からだ』と、チョコ。「他の二か所も心配だが、銀河不在では浄化ができない。まず照子を見つけ出してからだ』

「無事だといけれど、照子」紫電が不安げに眉をしかめる。「帰りも遅いし、若返って外出だなんてやっぱまずかったのよ。しかも「怨」まで出るし、ほんととタイミング悪すぎ!」

「由加里さん、苛立つのは分かるけど落ち着いて。頭から放電してるわよ」

「変身したら紫電だってば!」

『そうだ、紫電。兵士ならば冷静さが肝要…むっ!』

したり顔で説教を始めようとしたチヨコが、急に止まる。紫電と疾風が慌てて翼をひるがえす。

「急に何よ!」

『こ、この感じは…!』

チヨコの体が赤く光る。二人が見守るなかそれは、チヨコがぶるぶるつと震えると同時に紅い流星となつて飛び去って行った。

「…今のは、プリキュアの力」

「…歌舞伎町の方ね。丁度いいわ」

『ああ、急ごう!』

店の中まで流れ込んできた闇が、唐突に晴れた。

照子に覆いかぶさり、庇うようにして気を失っているマツをそつと寝かせ、照子はよろよろと立ちあがった。ホスト達は皆床に崩れ落ちている。

自分の体を見ると、柔らかな金色の光に包みこまれていた。ポケットの中のキュアクロックを取り出すと、かすかに光を放っている。これが自分を守っているらしい。

「あなた…ありがとう」

手すりに捕まりながら、照子は店の外に出た。ナツはどこへ行ったのだろう。確かあの時、慌てて外へ出ていき、その直後に闇の濁流が店を飲み込んで…

照子は店の外へと這い出した。そのまま夜空を見上げる。

闇は晴れている。いや、吹き飛ばされて散り散りになっている。一

番高いビルの看板の上、そこに誰か立っている。

金色に波立つ長い髪、西洋の軍服を思わせる白と黒の服装。襟元には赤いネクタイ。

そして、ひとすじだけ朱の入った銀色の片翼。

透き通るような蒼い瞳が、まっすぐに照子を見ている。その丸い目に照子は見覚えがあった。

「まさか…ナツちゃん…なの？」

目と目があうと、片翼の少女はにこりと笑う。そしてそのまま、蠢く闇へと突っ込んでいった。

「はぁあっ！」

気合一闪、少女の手刀が闇を裂く。背後から襲い来る闇の手を、回し蹴りで打ち砕く。降り注ぐ闇つぶてをひらりとかわし、空高く舞い上がる。そのまま全体重をかけてのかかと落とし。その全てを少女は舞うように、しかし目にも止まらぬ速さで行うのだ。

やがて、倒れていた人々も助けあって起き上がった。空を舞う赤い光に気付く。

「…プリキュアだ」

誰かが呟いた。

銀色の、片方だけの翼をひらめかせて闇を切り裂く少女。人々を再び包み込もうとする魔の手を、気合とともに蹴散らしていく金髪の乙女。頑張れ、頑張れプリキュア。小さな声が、次第に街全体を包んでいく。誰かが消火用ホースを持ち出す。別の誰かが消火器を引っ張り出す。

「子どもだけに危ない事、させられっか！」

「応援するぞプリキュア！」

消火器の泡や水だけでは、闇は消えない。が、その勢いに押されてじりじりと後退を始めた。それを見た別の者たちが、建物の残骸を闇に投げつける。棒で延びてくる触手を殴りつける。逃げ惑うばか

りだった人々が、武器を手にし立ち向かおうとしている。

負けるな、頑張れプリキュア。俺達も一緒に戦おう。協力して、あいつからこの街を守ろう。

その声が、思いが、光の力となり片翼の少女に流れ込む。少女を包む光が増していく。

「…あ、あれ見て！」誰かが叫んだ。「翼が、ほら！」

「…黒い、真つ黒な翼！」

一番深い闇、闇の親玉に突っ込んでいく少女の体を紅い光が包み込む。と、それまで見えなかった、左側の背から伸びているものが浮かび上がった。

漆黒の、闇より深い黒い翼。

右は銀翼、左は黒翼。異なる色の…異なる国の血を受け継いだ少女は、ネオンの消えた看板の上に降り立ち、凜とした声で叫んだ。

「私の名は、キュアシュヴァルベ」

「キュア…」瓦礫から這い出た照子は、まぶしそうに手をかざして呟く。ポケットの中のキュアクロックが、少女の声に呼応するように明滅する。

「夜空駆ける一對の翼、キュアシュヴァルベ！」

ビルの看板を足場に、闇の塊を追い詰めていくシュヴァルベ。延びてくる触手を両手でしっかと捕まえると、地面に足をつき、そのまゝ体を軸にして振り回す。

「おおりやあああ！！」

遠心力をつけ、手を離す。吹き飛ばす闇が。

「しまった！」

向かいのビルの窓、まだ逃げ遅れた人がいる。衝突する！その顔が青ざめた瞬間。

「っはああっ！」

ひと振りの短刀が空を切り、闇に突き刺さる。花火のような光を放ち、それは地面にどう、と落ちた。シュヴァルベが振り返る。

「待たせてごめんね、ナツちゃん！」

ポニーテールに赤いリボン、袴姿の少女。腰には見覚えのある懐中時計。

「…て、照子！？」

「今はキュア銀河よ。誉、彗星！私に力を！」

銀河の言葉と共に二振りの刀が現れる。金色の光を放つそれをしつかと握り、闇に向かっていく。

「私が突破口を作る！プリキュア・スターダスト・フォール！」

全身彗星となって突っ込んでいく、文字通り体当たりの攻撃に闇が吹き飛んでいく。更にシュヴァルベがとどめをさす。

「こそこそと暗がりでは悪事を働いて！お仕置きの日だよ！」

ばさりと左右の翼を羽ばたかせると、黒と銀の羽が周囲に舞い散る。それはそのまま鋭い刃となる。振りあげた手を、まっすぐ前に向ける。

「プリキュア・フェーダー・ツエアライセンっ！！」

黒と銀の羽吹雪が剃刀よりも鋭い刃となり、闇に牙をむいた。

闇の核になっていたのは、まだ幼さの残る少女だった。制服と思しきシャツのあちこちが破れている。

ごめんなさいね、と、銀河は呟いた。シュヴァルベが彼女を抱き起こす。

制服の少女を光が優しく包む。その頬に赤みがさしていく。

「…おかあさん」うわごとのように、瞳を閉じたままの少女が呟く。「おかあさん、おとうさん…」目の端からポロポロと涙がこぼれていく。

「まったく、ここはガキが来る場所じゃないんだから」と、困ったような笑顔でシュヴァルベ。その手が涙をそっと拭ってやる。「ウチへ帰ったら、父ちゃん母ちゃんに謝るんだよ」

銀河はそれを見守ると、一転、鋭い目でビルの上を睨みつける。ネオン看板の陰に隠れているのは、少女にクスリを打った売人。

「あなたね、この子に「怨」を植え付けたのは」

男が逃げようとするのを、短刀を投げつけて阻止する。光の刀に串刺しにされ、男の体から黒い闇がじわじわとにじみ出してくる。

「照子…ありや、何だい」

「この子を操っていた悪玉、悪意のかたまり…「怨」よ」銀河は夕ン、と地面を蹴り夜空に舞い上がる。

「誉、彗星！」その両手に光の刀が現出する。

「幼い心を誘惑する、極悪非道の怨念よ」

『プリキュアあああ！』男は…既に人間の形を失いつつある「怨」は、手足をばたつかせて叫んだ。『お、俺が消えてもまだ…！』

「あんたの悪事、お天道様はちゃーんと見てらっしゃるのよ！」

二振りの刀が、満天の星を宿したように輝く。

「リフレーションシュ！」

「由加里、和子、あんたら遅刻！」

金髪の美少女に名指しで叱られ、紫電と疾風は顔を見合わせた。

二人と一匹が舞い降りたビルの下は、街中の人間がごったがえしている。4人に増えたプリキュアの姿を一目見ようと混乱が起きているのだ。

「え…誰？」助けを求めるように、紫電。

「ナツちゃんよ。困ってる所を助けてもらったの」

救急車のサイレンが近づいてくる。ホストに託した被害者の少女も、じき病院に搬送されるだろう。体内に入り込んだ「怨」は浄化されたが、薬物との戦いはこれからだ。

「後はアタシが収集付けとくからあんたはもう帰んな、照子」と、肩をほぐしながらシュヴァルベが言う。彼女にはまだ、街の顔としての仕事が残っている。「もう夕飯の時間だろうに」

「ああ、それなら加賀君が言い訳考えとくそうだから」と、紫電。

「照子はあと二件、頑張ってもらわないとね」

「原宿と新橋。早く行かなきゃ警察の人が気の毒よ」と、あまり焦

った様子も無く、疾風。

『そうだ。早くこの場を去らねば、人々が押し掛けてくるぞ』

「そうだよ、チヨコ。何であんたが喋ってるかとか、詳しい事情は帰ってから聞くかね！」それだけ言い残し、シュヴァルベは助走を付けて空に舞い上がった。混乱を避ける為に何処かで変身を解くのだろう。残った3人は顔を見合わせ、翼を広げて夜空に舞い上がった。

眼下のざわめきが遠くなっていく。

「まさかナツちゃんまで変身しちゃうとはねえ」と、銀河。「プリキュアって何人現れるのかしら」

「「やまざくら」全員かもしれないわね」と、疾風。

「ったく、こんなババアをこき使うなんて。寿命が縮まったらどうしてくれんのさ」と、紫電がチヨコを睨みつける。「考えた奴をぶん殴ってやりたいね、私は」

『わ、私は違う！だから暴力はやめてくれ！』

「ほらほら、早く浄化に行かないと」

「あら、ヘリコプターが来たわ。手を振ってあげたほうが」

「疾風それだけはやめたほうが」

元の姿に戻ったナツは、不自由な左足をひきずるようにして店に戻ってきた。警察官や消防隊員もいる。

担架に乗せられて救急車へと運ばれていくのは、照子が助けた少女だ。「怨」だかなんだか知らないが、あんなガキまで酷い目に遭うのはロクなもんじゃない。ナツは目を曇らせる。

いつだって、犠牲になるのは年寄りやガキ、それに半端モンなんだと。

「奥様あー！」誰かが走ってくる。黒服の一人だ。「奥様、ご無事でしたか！」

「あ…ああ。何とかね」

ナツの姿を認めた者たちが、次々に駆け寄ってくる。ホスト、ホステス、キャバ嬢、バーテンダー。皆、服はすすけ、あちこちに傷を作っている。髪はほつれ絡まり、焦げている者もいる。

だが、その目は喜びの形を作っている。

「奥様、怪我はありませんか？」

「アタシは大丈夫だがアンタら……」

「私たちは平気です！」と、無残に破れたドレスのホステスが答える。「プリキュアが来たんです、それも二人も！」

「強かったよなー、金髪のプリキュア！」腕に包帯を巻いた黒服が応える。「あの真つ黒野郎をボッコボコにしてさ」

「んでも、俺たちだつて戦ったんですぜ！」割れたサングラスの男が後ろから叫ぶ。「名誉の負傷、しちまいましたけど」

「アンタは後ろでガクガクしてたでしょうが！」帯が解けかけたママが突っ込む。

わいわいがやがや、それぞれにプリキュアと自分たちの活躍を口にする人々。その後ろでは救急隊が、そして警察官と街の人間が助けあつて後始末をしている。

「……店は」ぽつりと、ナツが言う。「あたしの店、黒井酒店。どうなった？」

「無事ですよ」と、後ろからその肩を叩いたのはマツだった。ホスト達もいる。「照子さんも避難されたそうです。ご安心ください」「そう」と、ナツはそこで膝から崩れ落ちた。張り詰めていた気が抜けていく。変身して戦うなどという、とんでもない目に遭ったからだろう。そんなことをナツは考えた。

「オクサマ！マイガツ、大変ネ！」

「き、救急車！救急車！こつちまで来んかい！」
店が無事ならそれでいい。街も壊れたけど、みんな元気でいてくれた。

ヤクザもんも、警察も、みんな一緒に戦って守ったんだ。

「良かった……あんだ、良かったよ……」

小声で呟くナツ。その手には古ぼけた守り袋がしつかりと握られていた。

中には古ぼけたカレンダーの切れ端。1949年の8月。太い眉の青年がナツを生涯守ると約束した、あの夏だ。

「…あたしらの店、守ったよ…」

担架で運ばれながら、ナツはうわ言の様に呟いた。

封筒の山を開けると、中から雑誌や書籍、果ては自費出版の冊子まで出てきた。照子は首をかしげ、由加里はこめかみを押さえた。和子はニコニコと笑うだけだ。

『黒井さん、これは一体どういう事だ？』前足で器用にページをめくり、チヨコが聞く。『どれもみな、プリキュアの記事ばかりのようだ』

「敵を知り味方を知れば百戦錬磨、ってね」と、満面の笑みでナツが答える。「若い連中に言って、ありったけの本を買ってこさせたんだよ」

「百戦危うからずよ、ナツちゃん」と、和子。

誰だよ同人なんて出してる奴は… こういった手合いに辟易している由加里は、いち早く退散しようと車椅子を動かす。が、車輪を杖で止められてはどうしようもない。

「逃げんじやないよキュア紫電」にやり、とほくそえむナツ。由加里は口をパクパクさせる。文句の一つも言おうとしたのだから、結局喉からは空気しか出ない。悔しげに眼鏡の奥の目をゆがませる。「…こ、これを全部読むの？」照子は手近な本を取り、老眼鏡をかけて中身を検分した。週刊何とかというタイトルのそれは、プリキュア一人ひとりをカラー写真で鮮明に映し出している。名前、得意な技、推察される年齢など、呆れるほど詳しく解説がなされている。「そつだよ。ここに籠ってちゃあ世間の目なんて分かんないだろう

からねえ」

『黒井さんの言う事は尤もだ。テレヴィジョンだけでは情報収集能力に限りがあるからな』

「中島さんの体を何とかする方法もわかるかもしれないしねえ」

『おお、そうだ。「大和」の皆と連絡を取る手段も分かるやも』

「まあ、きれいな写真。こんなに美人さんに撮ってもらって。お部屋に飾ろうかしら」

「和子ちゃん、それだけはダメ！」

喧々諤々と交わされる会話を聞きながら、由加里は眉間を抑えて溜息をついた。

本当に、自分たちがこの国を救えるのだろうか、と。

第6話につづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2896w/>

リフレッシュプリキュア！

2011年10月9日15時54分発行